令和４年度東京大学附属図書館特別展示
「テエベス百門の断面図―歿後１００年記念 森鷗外旧蔵書展」

記念講演会記録

テエベスの夢

―鷗外文庫の深奥から―

〔講師〕 東京大学大学院総合文化研究科
出口 智之 准教授

開催日時：2022 年 10 月 28 日（金）
18:00 ～ 20:00
会　　場：東京大学総合図書館１階　記念室

目　次

開　会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

ご挨拶　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1

講　演

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2

一　鷗外文庫とは何か――その成立と現在　・・・・・・・・・・・・　3

二　鷗外と蔵書――書物への思い　・・・・・・・・・・・・・・・　6

三　蔵書に見る鷗外の姿――領域を超える多面体　・・・・・・・・・　11

四　エリーゼに与えた本と新出草稿――作品の背後に・・・・・・・・　23

おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34

質疑応答　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　34

閉　会　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37

講師略歴　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　37

図版凡例

*「資料番号」の表記があるものは展示資料。電子展示にて公開中。
*「画像 DB」の表記があるものは展示資料ではないが、鷗外文庫書入本画像データベースに収録されている資料。
*「鴎 F10:156」等の総合図書館の請求記号表記があるものは、展示資料ではなく、鷗外文庫書入本画像データベースに収録されていない鷗外文庫資料。
* 上記以外は、所蔵機関・内容を記載している。

参考ウェブサイト

テエベス百門の断面図　歿後 100 年記念　森鷗外旧蔵書展
　展示サイト　https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai2022/index.html
　電子展示　https://jpsearch.go.jp/gallery/utokyo-ogai2022
鷗外文庫書入本画像データベース　https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogai/page/home

開　会　｜　斎藤未夏　附属図書館情報サービス課長（司会進行）

それではお時間になりましたので、ただいまより令和 4 年度東京大学附属図書館特別展示の記念講演会を開始させていただきます。本日はハイブリッドでお送りしております。会場の皆様、そしてオンラインのご視聴の皆様、お忙しい中ご参加頂きまして誠にありがとうございます。私は司会を務めさせていただきます東京大学附属図書館情報サービス課長斎藤と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

まず、はじめに本学の坂井修一附属図書館長より、ご挨拶を申し上げます 。

ご挨拶　｜　坂井修一　附属図書館長

皆さま、こんばんは。会場にお越しいただいた方々もオンラインの方々もウエルカムです。ありがとうございます。今年は皆さんご存知の通り森鷗外歿後 100 年です。亡くなったのは 7 月 9 日の夏ですが、本学はこの秋に記念の特別展示をやらせていただくことになりました。日本中、津和野でも文京区の森鷗外記念館でも、あるいはジャーナリズムでも、鷗外歿後 100 年ということでいろんな特集が組まれておりますけれども、本学は鷗外のご遺族から鷗外文庫という形で、19,000 冊の本のご寄贈を受けて、図書館に保管しております。それを一つの基盤といたしまして、近代文学の研究者である出口智之先生のご研究もこの機会にお知らせしたいということで、このような企画を設けたわけでございます。本当に今日はありがとうございます。

ここまでが館長としてのご挨拶です。ここからは歌人としてのお話をしたいと思います。本日、出口先生が最後にお話しされるのは新発見の鷗外直筆の文書なのですが、そこにロセッティという名前が見えます。出口先生から最初にロセッティという名前を聞いた時に、私は最初ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティという、ラファエル前派の画家であり詩人であるロセッティを思ったのですが、どうもそうではなくてお父さんのロセッティの方でした。そのあたりの話をこれからうかがえるのも楽しみです。鷗外は歴史上の人物になりきっているかというと、ロセッティの話ひとつとってもそんなことはありません。鷗外が新出草稿の中でロセッティをあげているのは小倉に行く前です。鷗外は小倉に行って、小倉時代の終盤にしげさんと結婚して、東京に戻り、その後日露戦争に出かけるのですが、日露戦争後半の頃に、上田敏が『海潮音』という訳詩集を出します。その中にダンテ・ゲイブリエル・ロセッティとその妹のクリスティーナ・ロセッティの詩がいくつか載っているのです。その詩たちが、ロマン派の歌人たち、詩人たちに多大な影響を及ぼし、今日の我々に至っています。特に北原白秋の詩歌に、クリスティーナ・ロセッティの歌があります。「クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし秋のはじめの母の横顔」という歌があり、それは明らかに、上田敏の訳詞に影響を受けているのですが、その上田敏の『海潮音』には「遙に満洲なる森鷗外氏に此の書を献ず」と記されているのですね。そういうところから延々と我々、現代の歌人につながっているものがあります。鷗外は「美学」ということを初めてしっかりと言った近代人なのですが、そんなリアルタイムの鷗外に思いを

馳せながら、私は今日を本当に楽しみにしておりました。きっと皆さんもそうだと思います。ぜひ一緒に楽しみましょう。ではよろしくお願いいたします。

講　演　｜　出口智之　総合文化研究科准教授

はじめに

みなさま、こんばんは。お忙しいところ、ようこそお集まりくださいました。本学准教授の出口智之と申します。本日は 90 分ほどにわたってお話しさせていただきますので、どうかよろしくおつきあいください。

まず、18 時から 20 時という、いかにもおなかがすく時間帯にご来聴くださいまして、大変恐縮に存じます。私がフェローをつとめております本学のヒューマニティーズセンターでも、いつも金曜日にオープンセミナーが行われておりまして、そちらもやっぱりこの時間帯なんです。大学で行うイベントなので、土日に設定することが難しく、とはいえ平日では、授業に重ならない時間となるとこれくらい遅くせざるをえず、申しわけない次第です。ぼくもちょっとおなかがすいてしまうので、先ほど森鷗外も愛した湯島の名店、みつばちというアイスクリーム屋さんに行って、アイスクリームを食べてきたところです！

さて、鷗外と言いますと、どうしても軍医総監にして偉大な作家という、あのいかめしいイメージがありますよね。その反面、甘党だったり、子煩悩だったりと、まったく別の姿も有名です。でも今日は、そんな鷗外のほとんど知られていない、私たち研究者であってもアクセスすることが難しい、旧蔵書「鷗外文庫」から見えてくる鷗外の世界について、「テエベスの甍――鷗外文庫の深奥から」と題してお話しさせていただきたいと思います。

本日は、4 つのチャプターにわけてお話ししてゆきます。

まず第 1 チャプターは、「鷗外文庫とは何か――その成立と現在」で、鷗外文庫のご紹介からはじめたいと思います。続く第 2 チャプターは、「鷗外と蔵書――書物への思い」です。鷗外が書物をどう扱い、どういう思いを抱いていたのかということをお話ししてゆきます。第 3 チャプターは、「蔵書に見る鷗外の姿――領域を超える多面体」と題し、本展に展示しました資料を中心に、鷗外がどんな書籍を集め、どのような読書を展開し、どれほど幅広い知の複合体、多面体であったのかを見てみたいと思います。そして、最後の第 4 チャプターとして、「エリーゼへの本と新出草稿――作品の背後に」を設けました。今回の展示の主眼となりましたこの 2 つの資料について、作品の背後にある話までまじえてご紹介したいと思います。

一　鷗外文庫とは何か――その成立と現在

それではまず、第 1 チャプター「鷗外文庫とは何か――その成立と現在」に入りましょう。

森鷗外は、先ほどご紹介がありましたように、今から 100 年前、大正 11（1922）年の 7 月 9 日、数え 61 歳で他界しました。現代からすれば若い死去ですけれど、明治時代としてはほぼ平均的でした。その際、「漢書は図書寮の吉田氏に、文学書は私（女婿の山田珠樹――注）に、科学書は於菟氏に」と遺言したと伝わります。親友の賀古鶴所に書き取ってもらった、あの有名な「余ハ石見人森林太郎トシテ死セント欲ス」という遺言とは別に、奥さんのしげが筆記した、蔵書を誰にどう分配するかというような、もっと実務的な遺言があったようなのです。

この遺言は、鷗外の長女、茉莉の夫である山田珠樹に托されました。しかしながら彼は、故人の遺志に従うことで、鷗外の蔵書が分散することを惜しんだようです。というのは、鷗外は「漢書は図書寮の吉田氏」、すなわち鷗外が晩年に勤めた宮内省図書寮にて、最も信頼していた部下である吉田増蔵に漢籍をすべて与え、また文学書は東京帝大仏文科の助教授だった山田珠樹に与え、そして科学書は長男の森於菟に与えよ、としたわけです。でも、こうやって分割してしまうと、その 3 人の存命中はよいとしても、いつかみんな亡くなり、その遺族からさらに次の遺族へと受継がれてゆくころになると、どうしても蔵書が分散してしまう懸念がある。それはやはり惜しいということで、山田はこの遺言を執行することに難色を示したのでした。

一方、当時の東京帝国大学は、鷗外が亡くなった翌年の大正 12（1923）年に、関東大震災で甚大な被害を受けました。図書館も全焼し、76 万冊もの蔵書が灰燼に帰したと伝わっています。画面にお出ししたスライドに示しましたのが、当時の焼け落ちた図書館で、瓦礫が散乱する様子がよくわかります。いまでもこの総合図書館には、焼け残り本と称するごくわずかな本が残っていますけれど、それ以外ほとんどの本がなくなってしまったのでした。

震災後の東京帝国大学図書館
（東京大学総合図書館所蔵）

この状況を受け、国内外から多くの寄附・寄贈がありまして、ただいま会場のみなさんがいらっしゃるこの建物は、ロックフェラーJr.からの寄贈で建築されたものでした。もちろん、国内からもたくさんのお申出があり、そのなかにはたとえば紀州徳川家の南葵文庫をはじめ、現在、総合図書館の蔵書の一角を形成する、重要な文庫が含まれていました。そして、鷗外もまた本学の卒業生でしたし、長男の於菟が医学部に助手として勤務し、山田珠樹は文学部に勤めていたというつながりもあって、復興のために鷗外旧蔵書をすべて寄贈してはどうかと提案したのでした。

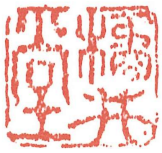
奥さんのしげには、故人の遺志に背くことにためらいがあったようなのですけれど、最終的には話がまとまり、寄贈が実現します。第 1 次寄贈が大正 15（1926）年に行われたのち、翌昭和 2（1927）年に目録が作られ、さらに昭和 11（1936）年に若干の追加寄贈が行われたと伝わっています。ただ、実際の鷗外文庫の状況を見てみると、ほかにも少しずつ寄贈されたような形跡があるのですけれど、そのあたりのことは詳しい記録が残っていません。

この寄贈を受けた図書館は、しかし鷗外旧蔵書をひとまとめにはせず、館内の分類基準に従って、ほかの本と同様に整理しました。つまり、「鷗外文庫」としてまとめて置くのではなく、総記は総記のところに、宗教は宗教のところに、歴史は歴史にというふうに、バラバラに収蔵したのです。いまから考えると少しもったいないようですし、また利用者に貸出されたりもしていたため、そういう扱いを受けることを嫌って、夏目漱石の旧蔵書が東大に入らなかったのは有名な話です。とはいえ、諸方から寄贈された文庫をすべて何とか文庫、何とか文庫というふうに区別して置いたのでは、利用者としてはきわめて不便ですし、一度それをやりはじめると、では誰からの寄贈なら独立した「文庫」の形にするのかという、基準の問題も発生しかねません。そういうわけで、しかたがないところもあったのだろうと思い、でもやっぱり惜しいなあとも思われ、なかなか難しいところではあります。

ともあれ、図書館は鷗外旧蔵書をほかの本と混ぜて配架しましたので、「鷗外文庫」の全体像を把握するのは著しく困難となりました。寄贈が複数次にわたって行われましたし、何しろ大正末～昭和初期のことなので、目録さえ完備していませんでした。したがって、鷗外の旧蔵書を判別するためには、寄贈時に捺された「鷗外蔵書」印だけが、唯一の基準となっていました。これは、鷗外の遺言に従って墓石の文字を揮毫した、画家・書家の中村不折による印鑑です。

「鷗外蔵書」印

ここにお示ししましたスライドには、5 つの印影をあげていますけれど、これはいずれも鷗外自身が用いた蔵書印です。おそらくは一番早い時期に用いられたと思われるのが「橘井堂」、あるいは「弍木之舎」あたりも早くから使われたようです（その後、「弍木之舎」印は鷗外の蔵書印ではないことを、山崎一穎さんよりご教示いただきました――注）。「森文庫」もかなり早く、それらとほぼ同時期に使われたようです。一方、数が多いのは「森蔵書」の印鑑でしょうか。「医学士森林太郎図書之記」は、鷗外が東大医学部を卒業して医学士になった時、それが嬉しくて作った印らしく、鷗外蔵書印のなかでは最も大きいものです。このドーンとした印からは、医学士の学位をもらえた喜びが伝わってきますね。



「橘井堂」

「弍木之舎」

「森文庫」

「森蔵書」

「医学士森林太郎図書之記」

でも、鷗外はすべての本に蔵書印を捺していたわけではありません。ということで、図書館側が捺した「鷗外蔵書」印だけが、唯一の基準となったわけです。この印鑑はしばしば、鷗外自身が用いたと誤解されるのですけれど、そういうわけで実は鷗外歿後に図書館が捺した印なのでした。

こうした状況を受け、図書館は平成 17（2005）年度から平成 21（2009）年度にかけて、つまりもう 21 世紀に入ってからなのですけれど、鷗外文庫を整理するプロジェクト、通称「鷗外文庫プロジェクト」を遂行いたしました。鷗外の蔵書が全部バラバラに配架されていて、目録さえちゃんとしておらず、何があるのかわからない状態だというのは、さすがにまずいと考えたのですね。

私自身も大学院生だったころに関わらせていただいたのですが、これはもう大変なプロジェクトでした。まず、総合図書館の書庫にあるすべての書籍を全部開き、あの「鷗外蔵書」印があるかどうかを確かめて、鷗外文庫本を 1 箇所に集める。一応、昭和 2（1927）年の目録があるとはいえ、その後の追加寄贈が洩れていたため、完全なリストが存在しなかったのは先にお話ししたとおりです。しかたがないので、すべての本を実際に見て、印鑑の有無を確認することになったわけです。

そうやって見つかった鷗外旧蔵書を、ひとまとまりに別置したうえで、今度はその全ページを開き、書入れがどこにあるかをチェックして、写し取ってゆくという作業を行いました。その結果、重要と判断された自筆本や書入れ本などについては、デジタル画像を撮影し、解題もつけたデータベースとしてウェブ上に公開するという、3 段階にわたるプロジェクトでした。かくして、鷗外文庫の全貌がはじめて明らかになったのです。先ほど坂井館長からのご紹介にもありましたとおり、19,000 冊ほどの和書、漢籍、洋書から成るコレクションで、またその本のなかに厖大な書入れが存在するということもはじめてわかりました。

図書館では、この鷗外文庫を活用したいということで、いくつかの展覧会を開きました。最も早い展示は、私たちが行った鷗外文庫プロジェクトより以前、昭和 58（1983）年に「鷗外文庫展」がこの総合図書館で開催されています。どうやら、その少し前にも鷗外についての展示は行われていたらしいのですが、ただそれは鷗外文庫本だけではなく、鷗外自身の著書や鷗外に関する研究書・評伝などもあわせて展示する、テーマ展示の形だったようです。それを除外しますと、鷗外文庫に焦点をあてた展示としては、この昭和 58 年の「鷗外文庫展」がはじめてでした。駒場の比較研究室、私が現在勤務している比較文学比較文化研究室ですけれども、そこにお勤めだった小堀桂一郎先生らによる洋書に関する調査をふまえ、その成果を生かしながら、すでに存在のわかっていた重要そうな鷗外文庫本を出して展示を構成したのでした。

その後しばらく経ち、鷗外文庫プロジェクトの終了後に、鷗外生誕 150 周年記念、またデータベースの完成記念ということもあって、平成 24（2012）年に「鷗外の書斎から」展がや

はり総合図書館で行われました。続いて平成 29（2017）年には、柏キャンパスの柏図書館で「鷗外文庫に見る几帳面な鷗外」展が行われ、どちらも私が監修して、講演もさせていただきました。そして今年の令和 4（2022）年、鷗外歿後 100 周年に際し、みなさまにご覧いただいた「テエベス百門の断面図」展が開催されたわけです。

前回の「鷗外の書斎から」展から今回まで、およそ 10 年の間があいています。前回展のあとにもう 1 度、これは鷗外関連ではない別の特別展示が行われているのですけれど、そのあと総合図書館が改修工事に入り、工事が終ったら今度は新型コロナウイルス感染症の流行によって、長く展示ができていませんでした。今回、8 年ぶりの特別展示を企画するにあたり、ちょうど森鷗外の歿後 100 年にあたっておりますので、これはやはり鷗外でゆきたいということで、坂井館長から展示指揮の打診をいただきました。また本展は、この東大本郷キャンパスのすぐ近くに位置しながら、これまで本格的な連携がはかれてこなかった文京区立森鷗外記念館さんの特別展、「鷗外遺産」展との連携も試みた、大規模な展覧会となりました。

以上、総合図書館と鷗外文庫、そして今回展についてのご紹介をしてまいりました。では続いて、展示されている資料を具体的に見てゆきたいと思います。

二　鷗外と蔵書――書物への思い

第 2 チャプターは「鷗外と蔵書――書物への思い」です。鷗外文庫の本を見てみますと、その姿が非常に整っていることに驚かされます。これについては、伊原青々園にこんな回想があります。

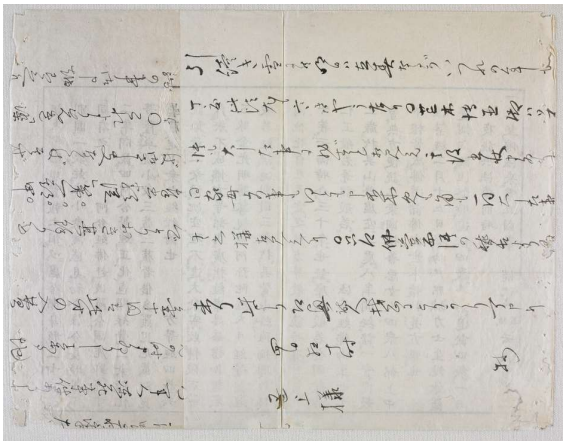
> 一しきり夜店の古本を買集める事に興味をもち出して、毎晩陸軍省からの帰りに本郷の露店を漁られた。…しかも斯やうにして買集められた古本は一々消毒をした上で、製本屋へ廻して製本を仕直された。中身よりも製本料が高くつくけれど、先生はそれを何とも思われなかった。
> （伊原青々園「鷗外先生」、『新小説』大正 11 年 8 月、岩波文庫『鷗外追想』所収）

この「一々消毒して」というところが、いかにも衛生学者の鷗外らしいですね。買っただけではなく、それを製本屋にまわして製本をなおす。本自体より製本代のほうが高くなっても、それでも本をきれいに取っておきたいという、いわば書物にかける愛情というか、思いみたいなものが、鷗外文庫本の姿からはよく伝わってきます。

鷗外文庫の本に見られる一般的な装幀は、こんな感じです。

まず、もとの本の綴じ糸を全部切って、バラバラに解体する。次に紙の折目に火熨斗、アイロンですね、それをあてて、ブワブワにならないようにする。続いて上部を化粧裁ちし、汚れがつきやすい部分を切り落としてきれいにする。紙が整ったら、柿渋が引かれた渋茶表紙をつける。裏表紙もおなじです。その表紙に題名を書いた紙、題箋と呼びますけれど、これを貼附する。この題箋は、ほとんど鷗外の自筆です。そして最後に、あらためて綴じなおすという形で製本されているのです。

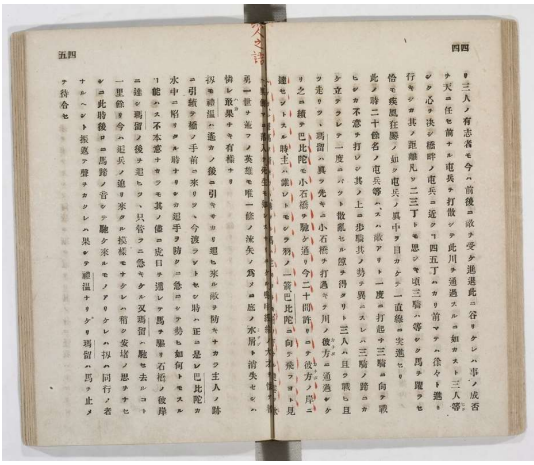
鷗外文庫本の代表的な装幀
『古京遺文』（画像DB）

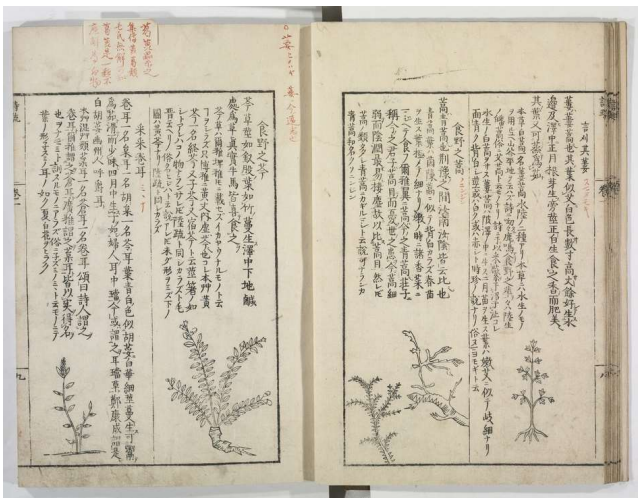

『宗旨雑記』裏打ち部分（画像DB）

伊原青々園の回想では、製本屋に出していたとありますけれど、鷗外文庫を調査しておりますと、実際には鷗外自身による再製本もかなり多いように感じられます。画面にお示ししました、『宗旨雑記』という本の裏打ちをご覧ください。こちら、本の紙がちょっと弱かったらしく、小倉時代にお母さんの峰さん宛てに送った手紙を裏側に貼って、補強しています。

鷗外は小倉時代、お母さん宛にかなりたくさんの手紙を送っていて、それは一度はちゃんと綴じて保管されていたらしいのですけれど、ある時バラバラにし、本の裏打ちに使ったのだと、長男の於菟さんが証言されています。別の本にも使われたらしいものの、現在鷗外文庫に残っているのはこの『宗旨雑記』だけです。かなりプライベートなことや、軍事に関することも書かれていますので、これを製本屋に送って裏打ちに用いさせるとは考えにくい。そうすると、やはり自宅でやったと見るべきで、しかも非常にていねいで細やかな作業が行われていることを考えると、鷗外自身の作業だったのだろうと思われます。

と申しますのは、先ほどあげた化粧裁ちについて、その実際をご覧いただくとよくわかるかと思います。画面右側にお示ししましたのが、矢野龍渓の『経国美談』です。この前編は明治16（1883）年に出た本で、自筆の書入れもあるのですけれど、どうやら早い時期の製本らしく、本の上部に書き入れたあとで化粧裁ちしてしまったため、書入れそのものが切れてしまっているんです。鷗外はある時これに気づき、以後は書入れをちゃんと残すべく、画面左側の『陸氏草木鳥獣虫魚疏


『経国美談』（画像DB）



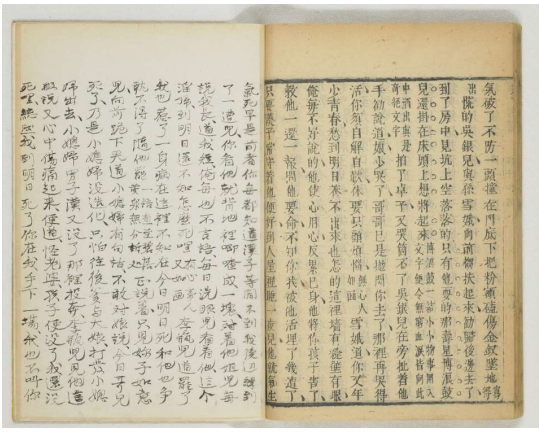
『陸氏草木鳥獣虫魚疏硫図解』（画像DB）

硫図解』に見られるような形にあらためました。つまり、紙の上側を切った時に、上部欄外、専門的には鼇頭と呼ぶ部分に記載された書入れを保存するため、そこだけ凸字になるように切り残し、さらにその両脇には少し切り込みを入れて、折り曲げる形で保存しているのです。これを自分の書入れだけじゃなく、先人の書入れについてもすべてやっているので、大変な面倒くささというか、ていねいさというか、ともかくよくここまでやるなあと思われます。そこまでしてでも、やっぱり本の上側、いわゆる「天」はきれいにしたいというこだわりなんでしょうね。

それから、これもびっくりすることに、中国の有名な小説『金瓶梅』の落丁部分を、自筆で補訂しているんです。こちらは本展には出展していませんが、画像データベースにはありますので、ぜひご参照ください。この本について、ということではないのですけれど、妹の小金井喜美子が、鷗外が行っていた落丁の補訂について回想しています。

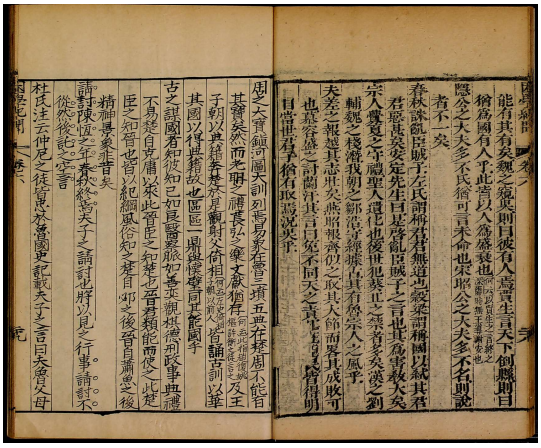
> 「この間はどんな本をお求めになりましたの。二晩もつづけてお出になるのは、よほどお気に入ったからでしょうと思いました。」／「いや、あれは神田の方で買った古本に落丁があってね。ちょうどその本があそこにあったから、買って来てそこだけ取って補充したのさ。二部は不用だし、向うは商売だから、また相手もあろうと思って、持って行ってやった帰りだった。多分その話はせずに、また誰かに売るのだろう。こっちは話したのだから疚しくはないがね。」
> （小金井喜美子『鷗外の思い出』、八木書店、昭和 31 年、岩波文庫所収）

鷗外が 2 日連続で神田に行ったので、どうしたのかと思って聞くと、前に買った本に落丁があったので、たまたま売っていたおなじ本を買ってきたのだと。そこから落丁の部分だけ取って補充すると、今度は取られたほうの本が落丁になりますよね。さすがにそれはいらないので、翌晩ふたたび神田に行って、落丁本だと断って古本屋に渡してきたのだそうです。そこまでするくらいですから、筆写で補うくらいのことはするでしょう。

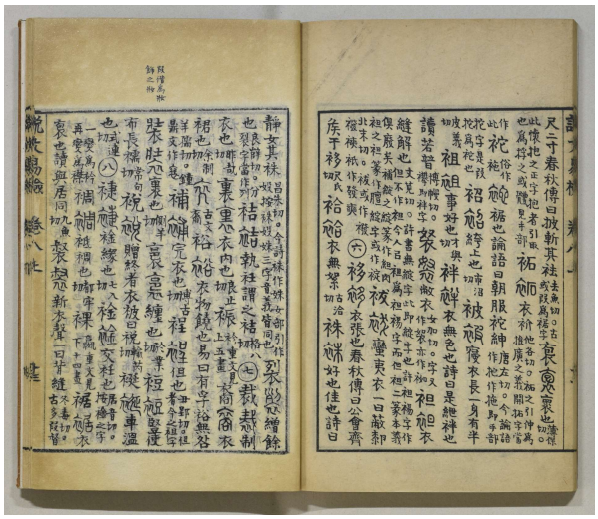


『金瓶梅』（画像DB）

それでも『金瓶梅』は、単に白紙に文章を筆記しただけですが、続いて画面にお示しした『困学紀聞』は、落丁部分がほかの丁から目立ってしまわないように、罫や柱まで再現して写しています。これが鷗外の自筆であることは、いくつかの筆蹟の特徴から明らかです。たとえば、「之」「知」「也」などが極端に扁平になったり、「献」「脈」「良」などの左払いがかならず二段になったり、「此」「見」などの最終画を真上にヒゲのように跳ね上げたりと、いずれも典型的な鷗外筆跡の特徴です。書法としては、幕末から明治にかけて活躍した書家、関雪江なんかの書法に近いようです。こういうところから、これはやはり鷗外自身の補訂と考えられます。この『困学紀聞』、出展もしておらず、画像データベースにもありませんので、今回の講演会だけでお見せしている資料です。



『困学紀聞』（鴎B60:41）



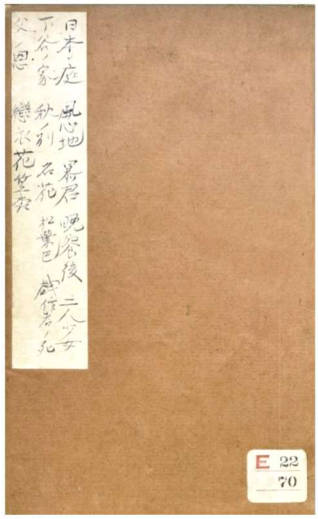
『説文易検』（資料番号3-3）

展示に出しましたのはこちら、『説文易検』という本で、これも画面に示した見開きの左側が鷗外自筆の補訂と考えられます。でも、あまりに精細で、ちょっと見てもまったくわからない。おそらく、会場で現物をご覧になっても、どこが補訂なのか全然ぴんとこないと思います。現物を手に取ってよくよく見ると、補訂部分は印刷されたほかの丁とは紙質が異なっていて、キラが入った薄い紙に書かれていることに気がつきます。

これは、中華民国 6（1917）年に上海で出た本なのですけれど、印刷された丁はちょっと厚めの紙なので、そういう同時代の本が個体によって様々に異なる紙に印刷されたとは考えにくく、他書からの取りあわせと見るのは難しいでしょう。では、何らかの印刷ではないかという声が、今回の展示チームのなかでも出ていたのですけれど、もしもこれを印刷しようとすると、まだコピーなどない時代、木版だか石版だかで行う以外にない。しかし、この落ちていた何丁かを、それぞれ 1 枚だけ摺るため、木版や石版の原版から作るのはあまりに不経済です。ということで、ひとまずは、やっぱり自分で補訂したのだろうと考えています。

では、この高精細な補訂はどうやったのかと申しますと、おそらく鷗外は別の本を一度解体し、落ちていた当該丁のうえに紙を敷いて、それを透写したのではないかと思います。そうすれば、基本的にもとの版面とおなじように複製されますよね。誰かにやらせた可能性も

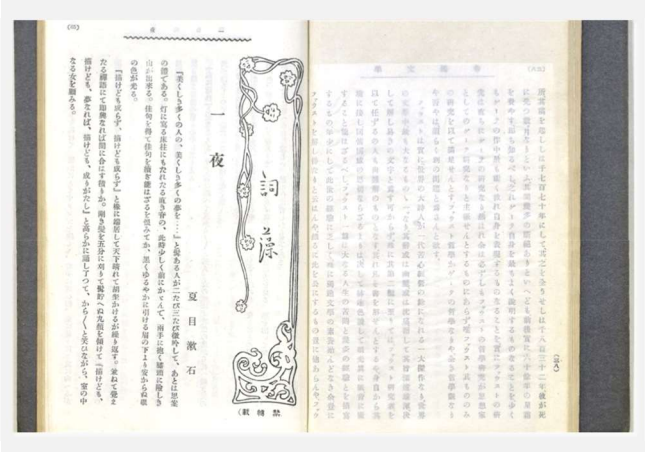
ありますけれど、よくよく見ると、やはりこの「也」をはじめいくつかの文字に、鷗外らしい書き癖が出ていることに気づきます。これは私が思っているだけで、証拠も何もありませんし、別の本とくらべて検討すればまた違う見解が出るのかもしれませんが、でもいまのところ鷗外の可能性が濃厚だろう、ここまでやる人は鷗外くらいしかいないんじゃないかと判断し、出展いたしました。



『[永井荷風集]』
（資料番号4-4）

ほかにも、鷗外のていねいさがうかがえる資料として、同時代の作家たちの小説を自分で製本したものを出しました。もとは雑誌に掲載された作品でして、それを保存しておきたいと思うようなことがあったとしても、普通だったらその雑誌自体を取っておくか、もしくは載っているページを切って保存しておくか、その程度ですよね。漱石なんかは人気があるので、新聞に連載された小説を切抜いて貼ったスクラップ帳が、いまでも古本屋さんに出たりしています。それくらいなら、いまでもやる人はいるでしょう。

ところが、鷗外はなんと、雑誌についても一度解体して必要なページだけを取出し、おなじページに載っている別の作品については、薄紙を上から貼って見えないようにし、それを何作も取りあわせたうえで、やはり渋茶表紙をつけ、自筆の題箋を書き、場合によっては目次まで書いて1冊の本にしているんです。今回は、鷗外がそうやって作った夏目漱石や幸田露伴、永井荷風らの作品集、どれも世界に1つだけの作品集を出展いたしました。みんな鷗外よりも歳下の作家たちですけれど、それでもこうやってていねいに集め、自分で本にしてゆくというところに、年齢にとらわれず才能ある作家に対して抱いた敬愛がうかがわれますし、同時に鷗外の几帳面さがよくわかる資料でもあります。



『幻影の盾・倫敦塔・一夜・カーライル博物館・二百十日』（資料番号4-1）

こういう文学関係の資料はもちろんのこと、鷗外文庫にはとにかく多方面にわたる本が所蔵されています。翻訳家であり、小説家・随筆家でもあり、そして丸善に勤務していた内田魯庵が、こんなことを言っています。

> 森君の博覧強記は誰知らぬものは無いが、学術書だろうが、通俗書だろうが、手当り任せに集めもし読みもした蔵書家であり博渉家であった。／ある時尋（ママ）ねると、極細い真書きで写し物をしているので、何を写してるかと訊くと、その頃地学雑誌に連掲した『鉱物字彙』であった。（中略）その時、そんなものを写してドウするのだと訊くと、「何

かの時には役に立つさ、」と云った。「何でも書物は一生の中一度役に立てばそれで沢山だ。そういう意味で学術的に貴いものなら何でも集めて置く、」と書棚の中の気象学会や地震学会の報告書を示した。

（内田魯庵「森鷗外君の追憶」、『明星』大正 11 年 8 月、岩波文庫『鷗外追想』所収）

ある時、魯庵が鷗外の宅を訪問すると、雑誌掲載の「鉱物字彙」を一生懸命に写していたというのですね。ここでは長くなるので略しましたが、彼がそれは近く丸善から刊行されるので、いま写すのは馬鹿馬鹿しいと教えると、鷗外は非常に喜んだそうです。「何でも書物は一生の中一度役に立てばそれで沢山だ」ということで、本当にあらゆる本を集めておきたい、知識欲の旺盛な人だったのですね。でも別に、稀覯本や貴重書を所有したいということではなく、とにかく学術的に貴ければ、何かの参考になりそうなものであれば、どんなものでも集めておく。あの形で再製本して架蔵しておくという、そういうこだわりを持っていたようです。

そんな鷗外の多方面にわたる興味は、本展では第 3 章に展示させていただきました。まだ東大に在学した若いころに熱中した煎茶から、楽器、古刀、甲冑、さらには先ほど化粧裁ちのところでお見せした『陸氏草木鳥獣虫魚疏硫図解』のような、いわば生物学の本、江戸時代の大工の技法を示した本、相撲の起源に関する本など、鷗外の興味は本当にいろんな方向に広がっています。鷗外文庫の蔵書は、書かれた作品にはかならずしもあらわれるとはかぎらない、そういう鷗外の興味を示しているのがおもしろいところです。一般に知られる作家・軍医というイメージとは別に、多彩な方面に広がる鷗外の興味や知識を見ることができるのです。

では、そういう蔵書を細かく調べてゆくと、どんな鷗外の姿が見えてくるのでしょうか。次の第 3 チャプターでは、鷗外の実人生を追いながら、蔵書から見える人物像についてお話してゆきたいと思います。

三　蔵書に見る鷗外の姿――領域を超える多面体

第 3 チャプターは、「蔵書に見る鷗外の姿――領域を超える多面体」と題しました。

先ほどから、森鷗外が東大医学部の学生だったころ、というふうに申しております。鷗外が東大に入ったのは明治 7（1874）年で、卒業したのは明治 14（1881）年です。ただし正確には、入学した時は東大医学部ではなく、第一大学区医学校と称していました。ところが、在学中に 2 回も名前が変って、卒業した時には東京大学医学部になっています。ただし、いまの東京大学ではありません。官立東京大学、一般には旧東京大学と称する学校です。鷗外が卒業したあと、帝国大学医科大学になり、それがさらに東京帝国大学医科大学→東京帝国大学医学部と変って、戦後に現在の東京大学医学部になったわけです。

この大学、鷗外が学んだ明治 10 年前後には、すべてドイツ語で授業が行われていました。

というのは、西洋医学を教えられる先生が日本人にはいませんので、ドイツから先生を招き、お雇い外国人教師として教えてもらっていたのですね。さらに前の時代、江戸幕府が作った種痘所のころは蘭方医学、つまりオランダ医学だったのですけれど、明治政府がこれを刷新してドイツ医学を採用することとし、新たにドイツから先生たちを招いたのでした。したがって、いまでいうほかの学部では英語で授業が行われていたのに、医学部だけはドイツ語だったのでした。

最初の先生のミュルレルという人は、来日してはじめて学校の様子を見た時、ものすごくびっくりしたそうです。ここでは単に「学校」と申していますので、みなさんおそらく、現代とおなじような学校の仕組みを想像されるだろうと思います。ところが、ミュルレルの着任時には、学生たちはオランダの医学書を、てんでに大声で読み上げていたのだそうです。

なぜそういうことになるのか。これはつまり、漢籍の素読とおなじです。江戸時代の寺子屋や藩校は、意味がわかろうがわかるまいが、とにかく「子曰く学びて時に之を習う…」と声に出して読み、暗記してしまう方法で教育が行われていました。素読といいます。そうやっていにしえの聖人の言葉をとにかく覚えてしまう、そしていずれ成長するにしたがい、その意味がわかるようになることを期待するというのが当時の教育ですから、ヨーロッパの学問にだってそれが適用されるのは当然です。それでも儒学であれば、まず「論語」からはじめて四書、続いて五経とだいたいの順序が決っていますけれど、オランダ医学にそんなものはないので、好き好きに面白そうな本を一生懸命素読して覚えていたのでしょうね。

びっくりしたミュルレルは、これを近代的な学校制度に再編してゆきます。つまり、入試を行う、在学年限を決める、まずは生徒を学力別のクラスにわけておき、ゆくゆくは学年を編成する、学年末試験や卒業試験を行う、みたいなことです。それが、鷗外が入学する前の年でした。そうやって制度を整え、いざ募集してみると、どうも人の集まりがよくない。いきなりオランダ語からドイツ語に転換したものの、英語ではなくドイツ語を学んでいる人が少ないうえ、江戸の感覚では医者は本流の侍ではありませんから、そもそも医学を学びたい人自体あまりいなかったのだろうと思います。何度も何度も追加募集をし、ようやくある程度の生徒数を集めたと伝わっています。

翌年、明治 7（1874）年に鷗外が入った時も、やっぱり入学希望者が少ない。鷗外が年齢を 2 歳ごまかし、規定の年齢より若く、満 11 歳で入学したというのは有名な話ですけれど、そんなことが許されたのは、とにかく人が集まらなかったからなのでした。すばらしい英才だったから、年上の学生たちと一緒に東大入試を受けても合格したのだということではありません。

ただし、当時の大学は現代とは異なり、入学の時にはいっぱい入れるけれども、学年末の試験で毎年どんどん落していって、最終的に卒業できるのはほんのわずかだという方式でした。だから、入るよりも出るほうが圧倒的に難しい。そして鷗外は、最年少で入学しながら、1 回

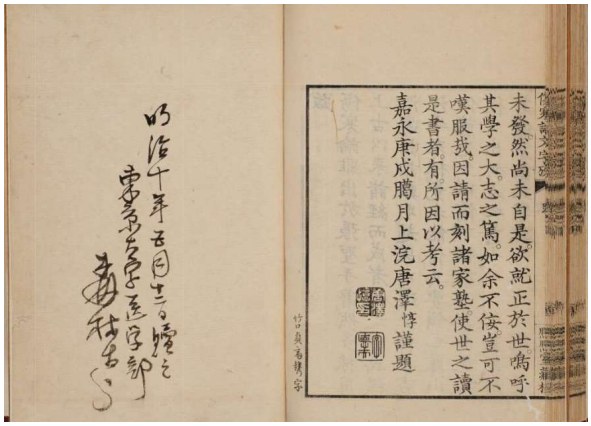
も留年せずに最年少で卒業しているんですね。最年少で入ったことではなく、最年少で出たことが、鷗外のものすごさなのです。

とはいえ、卒業時の順位は 30 人中 8 番で、上位 2 位か 3 位までに与えられる留学の権利は逸してしまいました。成績があまりふるわなかった理由は、下宿屋が焼けてノートを失ったとか、先生と喧嘩したとか、いろんな説が言われているのですけれど、鷗外文庫からわかることとしては、どうも彼はドイツ医学の勉強に専念していなかったようなのです。

画面下にお示ししましたのは、出展もしましたニューマイヤー（Felix von Niemeyer）の *Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie mit besonderer Rücksicht auf Physiologie und pathologische Anatomie*（『病理学と治療』）です。ドイツ語の医学書ですね。書入れもありますので、たしかに勉強した形跡はあります。

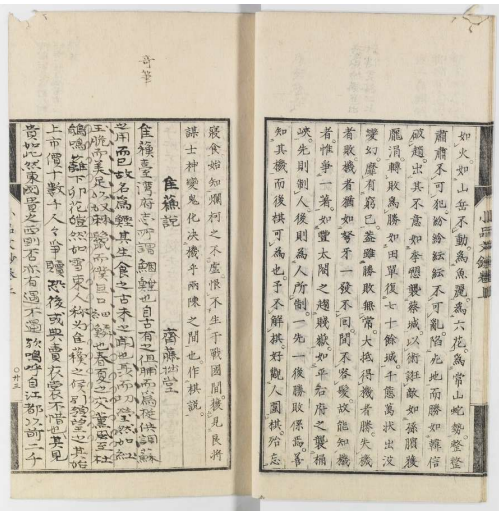
『病理学と治療』（資料番号1-7）

でも一方で、こちらにお示ししました伊藤鳳山『傷寒論文字攷』をご覧ください。これは「傷寒論」という、漢方医学のバイブルみたいな本に関する注釈書です。この本の最後に、「明治十年五月十二日購之／東京大学医学部森林太郎」と書いてありますので、鷗外はこれを明治 10（1877）年に買っていることがわかります。つまり、本来はドイツ語でドイツ医学を学んでいるはずの時期に、漢方医学の参考書を買って勉強していたらしいのです。



『傷寒論文字攷』（資料番号1-4）

それだけじゃありません。続いてお示ししましたのは、『近世名家小品文鈔』と申しまして、漢学者たちの名作を集めたアンソロジー、名文集です。幕末から明治のころにはこういう名文集がとても流行し、自分も漢詩文を学びたいという若い人たちは、それを読んで勉強していました。鷗外もその一人で、この『近世名家小品文鈔』は買ってきただけでは飽き足らず、ほかの本で気に入った漢詩文を余白に書き写しています。画面に出しましたのは斎藤拙堂の作品で、鷗外自筆の筆写です。上部欄外の鼇頭には、「奇筆」などと感想を書き込んでもいて、かなり熱心に学んでいた様子がうかがえます。もちろん読むだけではな

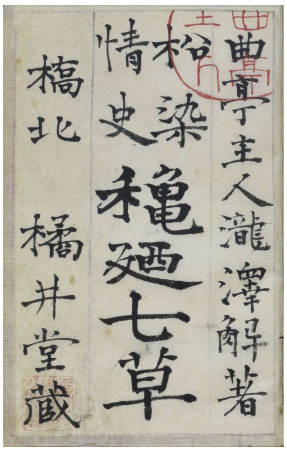


『近世名家小品文鈔』（画像DB）

く、依田学海という漢文人に教えを受けて、自分で作るほうも学んでおりました。

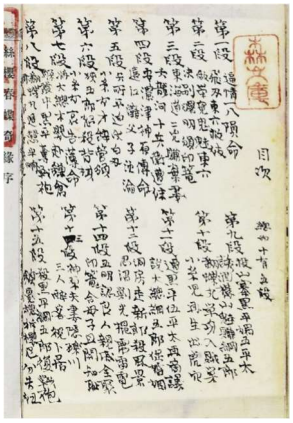
これはつまり、東大でドイツ医学を学ぶ一方、漢方医学についてもみずから学び、さらには漢詩文まで先生について勉強していたということです。鷗外は医者の家に生れ、漢方医の父に育てられ、蘭方も少し学びながらではありましたが、幼いころから漢学を学問の中心として身につけてきました。しかし、大学では明治政府の方針によって、蘭方でさえなく、ドイツ医学を学ぶことになります。新時代で活躍するにはドイツ医学を身につける必要があるけれど、でも津和野で親しんだ漢学や父祖の業もそう簡単には捨てられない、鷗外はその狭間に立って、引裂かれた自己を生きていたのだろうと思います。そのことが、鷗外文庫の本のなかには残っているのだろうと、そんなふうに僕は思っています。

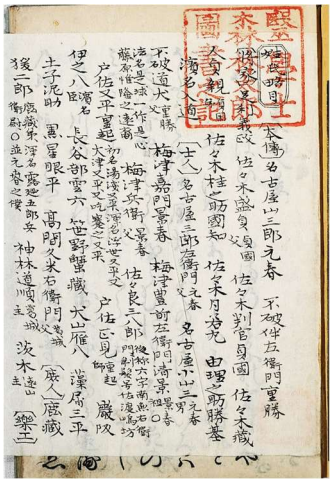
こういう鷗外の文芸への興味は、漢詩文にかぎらず、江戸の俗文芸にも向いていました。よく読んだ形跡のあるのが曲亭馬琴で、たとえば『松染情史秋七草』では、弟の篤次郎と一緒になって扉を自作しています。右上に捺された朱印、関防印と呼びますが、それまで再現していて、いかにもていねいな作業ですね。所蔵者が「橋北 橘井堂」とされているのは、これはお父さんが開いた医院の名前です。千住大橋の北側、いまの北千住の駅前あたりにありまして、鷗外自身が橘井堂と名づけたと伝わっています。



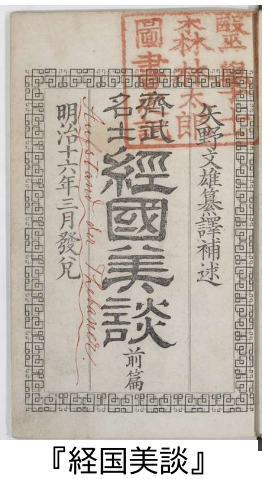
『松染情史秋七草』
（資料番号1-14）

それから、画面の一番左に示しました『糸桜春蝶奇縁』は、これは鷗外ではなくて篤次郎の字で、やはりていねいに目次を作っています。鷗外が自分で書いたのは、右から 2 番目の『昔話稲妻表紙』ですね。鷗外の肉筆による「姓氏略目」が折込みで貼られています。江戸の戯作、特に読本や合巻には人がたくさん出てきて、頭がこんがらがりますので、こうやって一覧を作ったんですね。それだけ熟読していたということでしょう。


『糸桜春蝶奇縁』
（鴎E24:338）

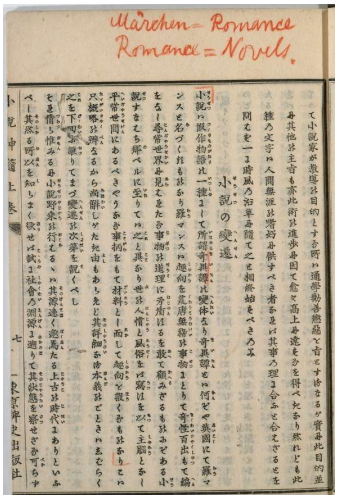

『昔話稲妻表紙』
（画像DB）

画面の真ん中は、先ほども少しふれました矢野龍渓の『経国美談』です。明治 16 年 3 月の本で、ギリシャのテーベの話だというふうに、朱筆でドイツ語を書入れています。この本に見えている「医学士森林太郎図書之記」という蔵書印、これが先ほど申しました、医学士になったのが嬉しくて作った蔵書印です。かなり大きいですよね。これが捺されているということは、まさに医学士になった前後、こういう文芸書を読みあさっていたのだということを示しています。



『経国美談』
（画像DB）

画面右側は、坪内逍遙の有名な『小説神髄』です。近代文学のはじまりを告げる、とても有名な評論で、鷗外はこの部分の上のほうに、“Märchen = Romance”“Romance = Novels”と書入れ、内容を整理している。鷗外はこうやって、日本語の本にドイツ語を書いたり、ドイツ語の本に漢文や和文を書入れることがしばしばあります。こういう書入れをしておくことで、インデックスとして読書の助けにもし、また考えを整理したりするのが、鷗外の読書の癖でした。そのおかげで、こうやって彼の読書の跡をたどってゆけるのです。



『小説神髄』
（資料番号1-15）

『経国美談』は卒業後の刊行ですし、『小説神髄』が出たのはドイツ留学中ではありますけれど、ともかく鷗外が医学生時代から、曲亭馬琴などの俗文芸にも親しんでいたことはたしかです。ほかの優秀な学生たちが、一生懸命ドイツ医学を学んでいる時に、漢方医学や漢詩文の勉強をしてみたり、馬琴の作品についてノートを作ってみたり、そんなことをしていたら、いかに鷗外の才能でもトップはとりづらかったでしょう。でも逆に、これだけいろんなことに手を出しながら、最年少で、かつ 1 度も留年せず、ストレートで卒業したのだと考えると、鷗外のものすごさはむしろそのあたりに示されているようです。

ともあれ、鷗外は東大医学部を 30 人中 8 番で卒業することになり、留学の権利は逸してしまいました。自分は年が若いから、それを加味して留学させてもらえないかと期待していたようなのですけれど、残念ながらそれは無理だったのでした。

学生時代の鷗外の写真をお示ししておきました。真ん中にいるのが鷗外で、右側が賀古鶴所、左側がちょっと年上の小池正直です。賀古鶴所は生涯にわたって鷗外の親友となった人で、耳鼻科を専門としました。小池正直は鷗外の前任の陸軍省医務局長・軍医総監で、鷗外に小倉異動の辞令を出した人です。鷗外がこれを左遷と捉え、以後小池を嫌うようになったというのは、有名な話ですね。でもこのころはまだ仲がよく、この 3 人はともに陸軍に入ったのでした。

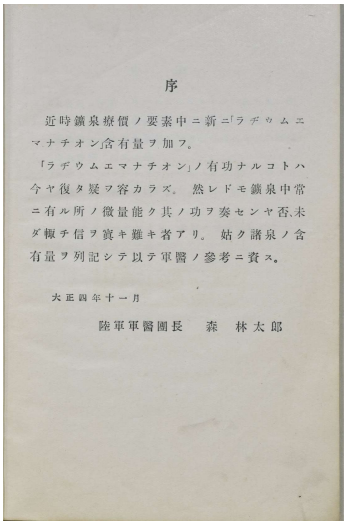
「学生時代の鷗外」
『鷗外全集』15巻 鷗外全集刊行会
（東京大学総合図書館所蔵）

もっとも、鷗外の陸軍入りは小池や賀古よりも少し遅れます。お父さんの橘井堂を手伝いながら、文部省からの留学生に選ばれないかと待っていたからです。でもそれは不可能だとわかりましたし、一方で親友の賀古が陸軍に入ったり、小池からの強い推薦があったり、親戚の西周が陸軍と強い繋がりを持っていたり、そういういろいろな条件が整って、ついに明治 14（1881）年の末に陸軍に入ったのでした。以後鷗外は、大正 5（1916）年に退職するまで、長きにわたって陸軍に勤務することになりました。

現代では、森鷗外といえばやはり文学者というイメージが強いですけれど、鷗外自身は自分の本務は軍医だという意識を強く持っていたようです。鷗外文庫には、そうした軍医としての職務を示す書籍がたくさん残っています。出展しました書籍で申しますと、たとえば『台湾誌』ですね。参謀本部が明治 28（1895）年、すなわち日清戦争が終わったころに作ったもので、戦争に勝利した日本が清国に無理やり台湾を割譲させた。そうやって日本のものになった台湾に関する地誌を、参謀本部が出したのでした。鷗外は日清戦争に出征し、終戦後もすぐに帰国するのではなく、上官の石黒忠悳の命でそのまま台湾に赴任しています。かくして、医官として台湾統治にも関わっていましたので、それでこういうものが残されているのでしょう。

『台湾誌』
（資料番号2-12）

次にお出ししましたのは、『日本鉱泉ラヂウムエマナチオン含有量表』です。これはラジウム温泉に関する調査報告で、大正期、ラジウム温泉が体によいというので流行した時代がありました。それで、軍部が調査することになって、鷗外はその団長をつとめたのでした。実際には自分が行ったわけではなくて、人を派遣してラジウムの含有量を調査させたのですけれど、ともかくその報告書をまとめさせ、そこにラジウム温泉の効能を書いた序文を寄せている。大正 4（1915）年の執筆なので、「じいさんばあさん」や「最後の一句」を書いたころ、こんな仕事までしていたのです。



序

近時鑛泉療價ノ要素中ニ新ニ「ラヂウムエマナチオン」含有量ヲ加フ。

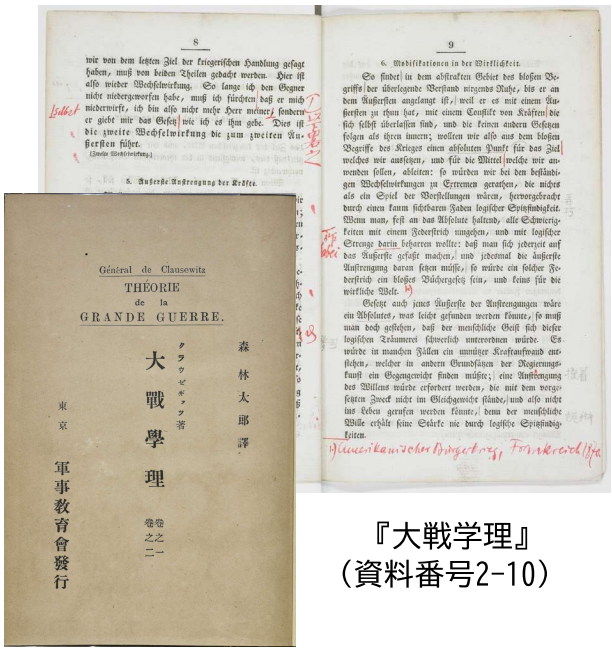
「ラヂウムエマナチオン」ノ有功ナルコトハ今ヤ復タ疑ヲ容カラズ。然レドモ鑛泉中常ニ有ル所ノ微量能ク其ノ功ヲ奏センヤ否、未ダ輙チ信ヲ寘キ難キ者アリ。姑ク諸泉ノ含有量ヲ列記シテ以テ軍醫ノ參考ニ資ス。

大正四年十一月

陸軍軍醫團長　森　林太郎

『日本鉱泉ラヂウムエマナチオン含有量表』（資料番号2-8）

クラウゼヴィッツ『戦争論』
（資料番号2-11）

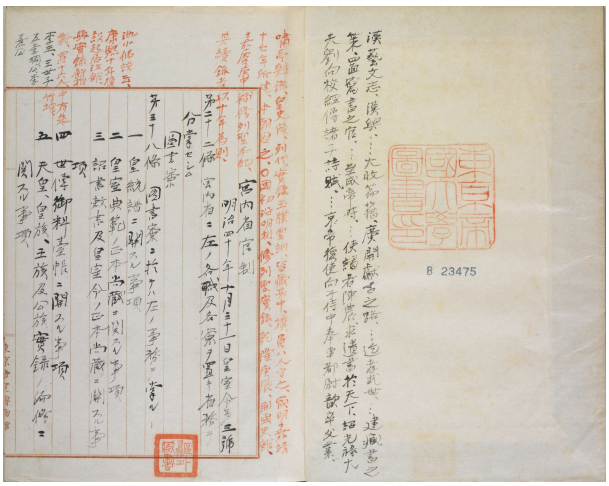


『大戦学理』
（資料番号2-10）

そのほか、軍での仕事としてよく知られるのは、やっぱりクラウゼヴィッツ『戦争論』の翻訳でしょうか。この大変難解とされる本を、鷗外は熱心に読込んでいて、明治 30 年代からすでに翻訳を手がけはじめています。明治 36（1903）年、『大戦学理』という題名で抄訳を出しましたので、本展ではその翻訳原本と訳本の両方を展示しておきました。

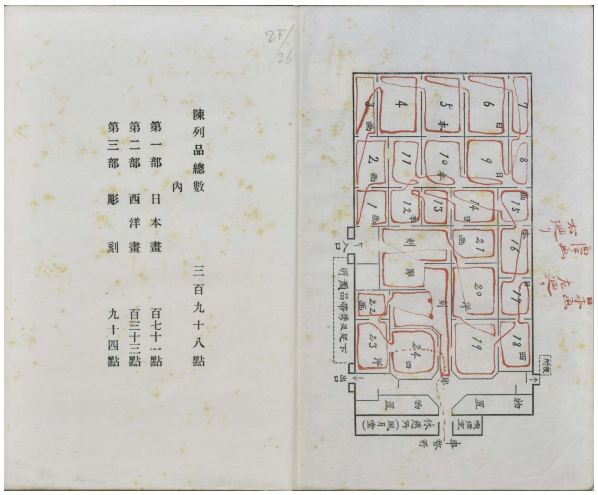
陸軍を辞めたあとは、1 年半ほどのんびりしたあと、今度は文化行政のほうにシフトして、帝室博物館総長兼図書頭という役職に就きます。帝室

博物館総長は、現在の東京・京都・奈良の 3 国立博物館を束ねる総長であり、図書寮は現在の宮内庁書陵部ですので、その双方のトップを兼任したわけです。聞いただけでも恐ろしい、激務の予感がしますね。でも鷗外はやっぱり精力的に、月・水・金は博物館に、火・木・土は図書寮にと日替りで出勤しまして、次々に業務をこなしてゆきました。それらの事務的な書類をまとめたのが、『寮館事略』です。



『寮館事略』（資料番号2-19）

そうした公務の一方、さらに帝国美術院長に招かれて美術家たちを束ねる仕事をしたり、仮名遣いの改定を検討する委員会に出席したり、本当にいろんなところに参加しています。鷗外文庫には、こういう文化行政の方面で用いた資料も残されています。今回は、大正 8（1919）年に行われた第 3 回帝国美術院展の出品目録をお出ししました。鷗外はここにも書入れをしておりまして、こういうルートで見るのだ、というようなことを朱筆で書いています。



陳列品總數　三百九十八點
内
第一部　日本畫　百七十一點
第二部　西洋畫　百三十三點
第三部　彫刻　九十四點

『帝國美術院第三回美術展覽會
陳列品目録』（資料番号2-21）

鷗外が美術の分野に招かれるというのは、彼を文学者としてしかご存じないとちょっと不思議な感じがするかもしれませんが、かなり早くから美術に興味を持っておりました。ドイツ流の審美学、いまでいう美学の紹介者、解説者として、あるいは高い審美眼を持つ美術批評家として、高い評価を受けた存在でもあったのです。自分自身で、何か美術品を創作するわけではないのですけれど、それでも帝国美術院の院長に招かれたのはそういうわけです。

当時、美術院は日本画と洋画にわかれ、そのどちらの内部でも対立を起こしていました。そういう対立している人たちを一堂に集めてまとめねばなりませんし、しかも彫刻家の高村光雲とか、江戸時代から活躍している文人画家の富岡鉄斎とか、かなり上の世代の顔ぶれも見えています。洋画壇の中心である黒田清輝は、子爵家の息子（ただし養子）です。それほどの面々の上に立ち、誰からも納得されてまとめられるなんていう存在は、もはや鷗外ぐらいしかいないのです。初回の会合の様子を撮影した、有名な写真が残っていますけれど、向って左に洋画家、右に日本画家がずらっと並んでいて、その中央奥に鷗外が鎮座しているという、いかにも象徴的な構図です。

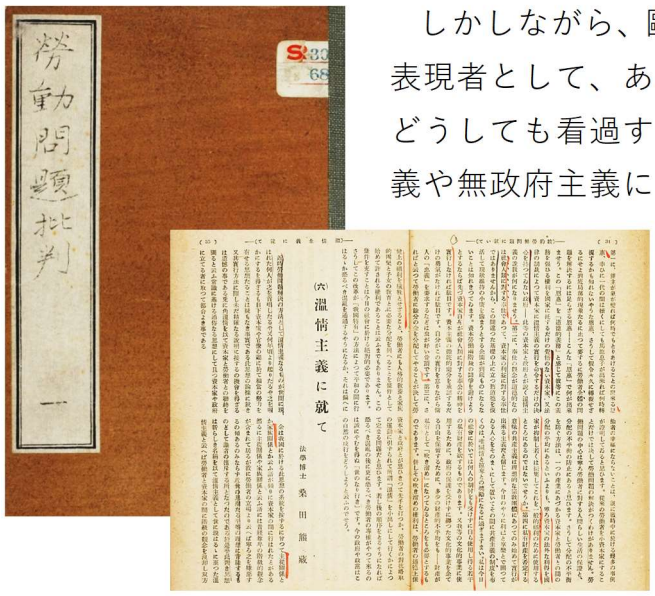
その一方、鷗外は高級官僚として体制の中枢におりましたので、文学者として活動するに

は、いろいろ難しいところもありました。長女の茉莉と末子の類が、こんな回想を残しています。

> 父は体の中からの帝室主義者であったらしい。併し父の考えはそこに偏してはいなかった。過激思想の擡頭して来た頃父は過激思想の本を読む事を禁じる事がいけない、といった。取締る役人が先ず第一に読まなくてはいけない、と言った。それはそうだろう。分らないで留められて服する人はいないだろうから。深く究めればその思想に偏することはない、と言った。
> （森茉莉「人間の「よさ」を持った父」、講談社文芸文庫『父の帽子』所収）

> 大きい時代の流れでおこること（革命―注）は仕方がないが、母はそれに付属する暴動を恐れていた。帝室博物館総長兼図書頭をしていた父が「新しい思想を弾圧してはいけない。よく勉強してみなければ」と言い、晩年その研究に着手していたことが母の心配の大もとであった。
> （森類『鷗外の子供たち』、光文社、昭和 31 年、ちくま文庫所収）

ここで「過激思想」と言われているのは、すなわち社会主義や無政府主義などのことです。明治 43（1910）年に、「大逆事件」という有名な事件が起こりました。明治天皇の爆殺を企てたというので、社会主義者たちが非常に幅広く、まったくの無実の人たちまで、一気に検挙されました。そのうえで、秘密裁判の末に 12 名を死刑に処した、それも爆殺計画とは無関係な人まで死刑にしたという、大変著名な事件です。鷗外は当時、まだ陸軍に勤めておりましたし、陸軍の創設者の一人であり、大逆事件の背後で大きな影響力をおよぼしていた、山県有朋伯爵の側近でもありました。ですので、大逆事件がフレームアップ、でっちあげの部分を相当に含んでいるということまで、ある程度は知っていたふしがあるんですね。



『労働問題批判』（資料番号3-9）

しかしながら、鷗外はそうやって体制側にいながらも、文学者、表現者として、あるいは学者として、思想や言論、表現の弾圧はどうしても看過することができませんでした。かねてより社会主義や無政府主義について学んでいて、ヨーロッパから本も取寄せて読んでいたらしく、被告たちの弁護を担当した弁護士・歌人の平出修に、そうした思想に関する講義までしたと伝わっています。

実際、鷗外文庫には社会主義思想に関する書籍がいくつか残されています。画面にお示しました『労働問題批判』は、こういう題名の本があるわけではなくて、これもやはり鷗外が自分で雑誌記事を切抜いて製本した資

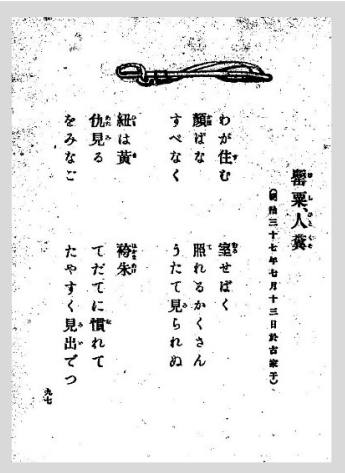
料です。大正 8（1919）年から大正 9（1920）年に、雑誌『改造』などに発表された記事を集め、先述した漱石や露伴の作品集と同様、1 冊に仕立てたんですね。ですので、「大逆事件」以前のものではないのですけれど、でも鷗外は大逆事件以後、社会主義の冬の時代とされる時を経てもなお、体制のなかにありながら強い興味を持って社会主義思想を勉強していたということがよくわかります。茉莉や類が伝えるように、「過激思想」の本を実によく勉強していたということが、蔵書のなかからわかるんですね。ここからは、思想・表現・言論・学問の自由にかける、鷗外の熱い思いが伝わってきます。

このあたりの本は、大正 15（1926）年の第 1 次寄贈ではなく、その後の追加寄贈で入ったらしく、従来の鷗外文庫目録には入っておりませんでした。プロジェクトチームの調査によって、あらためて発見された資料です。なかを見てみると、かなり綿密な書入れが施されていますので、よほど興味を持って学んでいたのだということわかります。

もちろん、鷗外はやはり体制側の人間ですから、自分自身が社会主義思想に共鳴したり、無政府主義運動に荷担したりすることはありませんでした。また、軍人としては、天皇暗殺なんていう計画は絶対に許すことはできません。しかし、だからといって思想や言論への弾圧はけっして容認できない、自分もそこに何らかのアクションを起すべきだと思っていた鷗外の、知的な自由と学問の自由とを重んじる姿勢、そしてその思いを背後から支えている、広範な知識への興味が、鷗外文庫のなかには示されているのです。

そうした鷗外の、体制側にありながら同時に文学者であるという難しさは、表現への挑戦にもうかがわれます。

日露戦争で大陸に出征した日本兵が、中国人の女性を暴行して殺害したという戦争犯罪について、鷗外は帰還した直後に『うた日記』のなかで取上げています。「罌粟、人糞」という詩と、それに附随する 2 首の短歌で描いているのですけれど、これを日露戦争の終戦直後、陸軍軍医のトップとして公にするのは大変なことだったでしょう。それだけに、この詩はかなり難解で、パッと読んだだけではなかなか意味が取れないようになっています。後世になると、この戦争犯罪を行ったのは日本兵ではなく、ロシア兵だという説まで出てきたほどです。この問題については、大塚美保さんが論文を書かれ、犯人は日本兵だったということを明らかにされているのですけれど、一時期はそれすらもわからなくなるくらい、難解な書きぶりなのでした。

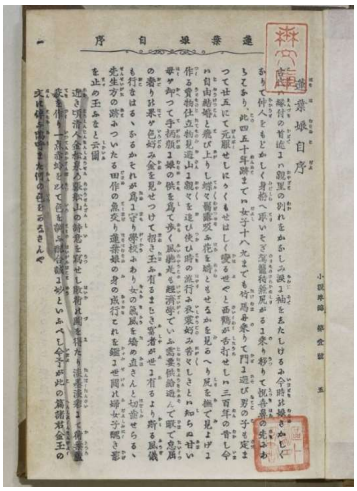

罌粟、人糞
（明治三十七年七月十三日於古茶毛）
わが住む
顔ばな
すべなく
紐は黄
仇見る
をみなご
密せばく
照れるかくさん
うたて見られぬ
粉糠
てだてに慣れて
たやすく見出でつ
「罌粟、人糞」
『うた日記』より
（国立国会図書館
ウェブサイトから転載）

『支那印象記』
（資料番号2-15）

鷗外の立場でこの詩を発表したことだけでも相当な挑戦ですが、彼はさらにおなじ題材で、小説「鼠坂」を執筆しています。やはり立場的に、兵士が起した犯罪として表に出すことは

難しかったようで、人物の設定などをいろいろぼかしているのですけれど、それでも 2 度にわたってこの事件を筆にしたところに、文学者としてどうしても見過ごしにはできないという、表現者、文学者としての思いを感じることができます。本展では、この「鼠坂」に影響を与えたとされる、小林愛雄『支那印象記』を出展しました。

著者の小林愛雄は、本職は高校の先生でして、『支那印象記』は彼から贈られた寄贈本です。ほかにも鷗外文庫には、鷗外の多彩な人脈がうかがわれる書籍がたくさん残されており、本展第 4 章にはそうした寄贈本をたくさん出展いたしました。ここでいくつかご紹介しますと、まず饗庭篁村の『蓮葉娘・川ぞひ柳・新殺生石』です。篁村は、いまではほとんど名前が知られていませんけれど、尾崎紅葉や幸田露伴たちが登場する以前の、大人気作家でした。鷗外にとっても先輩作家なので、敬意を払っておりまして、のちに明治 30（1897）年前後、「雲中語」という新作小説の合評会をやった時には、篁村のこともちゃんと招いています。こちらの本にも書入れがあって、先輩作家の本をしっかり読んでいたことがうかがえます。

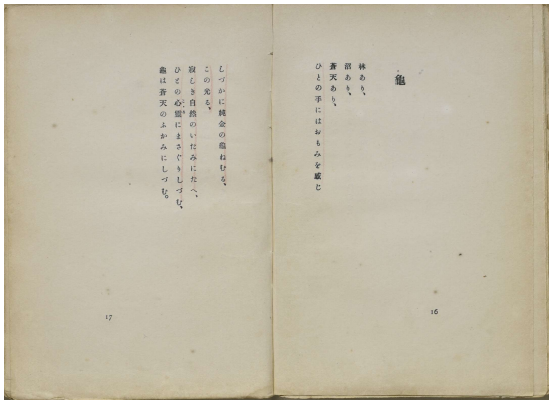


『蓮葉娘・川ぞひ柳・新殺生石』（資料番号4-5）

続いて、明治 35（1902）年に正岡子規が亡くなった際、彼が中心になって編集していた雑誌『ホトトギス』が出した追悼号です。鷗外と子規とは日清戦争の戦地ではじめて会い、それ以来しばしば行き来する仲でした。そんな 2 人のつながりをうかがわせる本です。

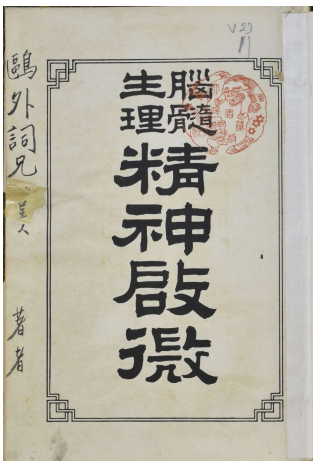
『子規追悼集』（資料番号4-7）

3 番目は、萩原朔太郎から贈られた詩集『月に吠える』です。朔太郎の来訪は日記にも記されていて、また来訪を報じた手紙も残っています。この『月に吠える』には、鷗外が赤鉛筆で傍線を書入れていて、この若い詩人を高く評価し、熟読していた形跡がうかがわれます。ちなみに、本好きのかたには有名な話ですけれど、この『月に吠える』にははじめに作られた無削除版というのがあります。ところが、そのまま出版するなら発禁処分にするという警告を受け、危ない作品を急いで削ってあらためて作りなおしたのが削除版です。無削除版はほとんど残っていませんので、きわめて稀覯な本です。鷗外文庫本も無削除版だといいなあと思ったのですけれど、調べてみると残念ながら削除版でした。

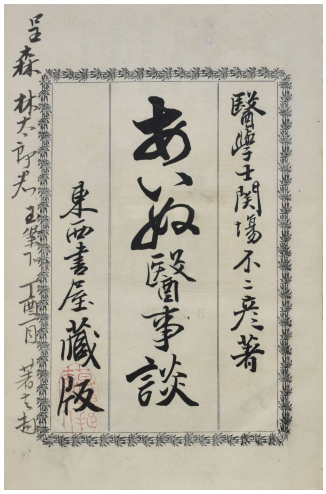


『詩集 月に吠える』（資料番号4-8）

4番目は、ドイツ時代に知りあった精神医学者、呉秀三から贈られた本。5番目も、医者同士のつながりということで、鷗外弟の森篤次郎と東大で同期だった、関場不二彦という医者から贈られた『あいぬ医事談』です。妹である小金井喜美子の夫、つまり鷗外にとっては義弟であり、かつ東大医学部の1年先輩でもある小金井良精が、アイヌの研究者でもありましたから、そういうあたりも関係して贈られた本なのかもしれません。

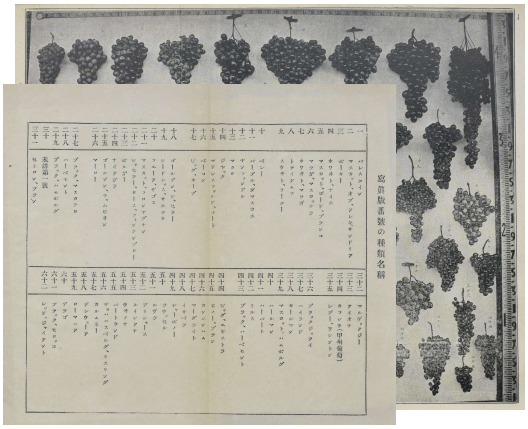


『精神啓微：脳髄生理』（資料番号4-9）

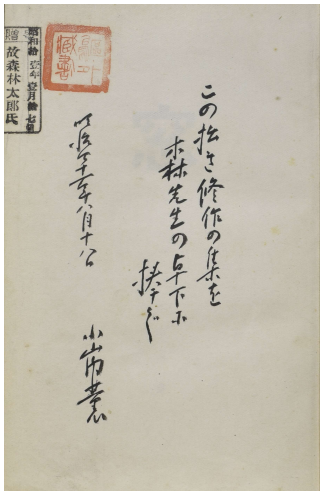


『あいぬ医事談』（資料番号4-10）

続いては、川上善兵衛という日本ワインの父からの本です。いま、日本で広く栽培されているマスカット・ベーリーAという品種を作り、国産ワインの父祖となりました。鷗外にはかなりいろいろな本を贈っているのですけれど、ここでは葡萄の品種や栽培に関する本を出展しておきました。

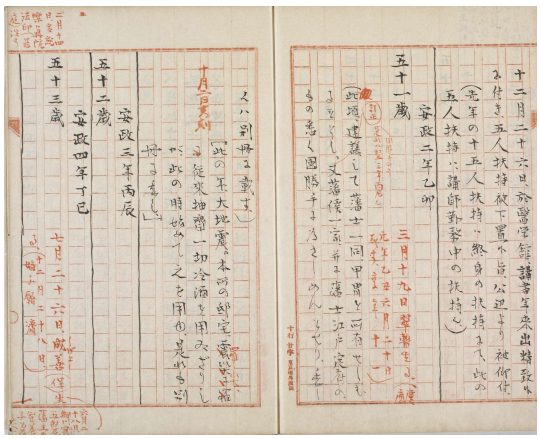

『葡萄種類説明』（資料番号4-12）

小山内薫の『窓』は、この本自体が鷗外に献呈されているのですけれど、鷗外文庫本にはさらに、自筆の献辞が重ねて入っています。そのほか、津和野藩の旧藩主である亀井家に関する本や、哲学者の井上哲次郎から贈られた本、新聞記者であり、政治家でもあった竹越三叉からの本、そして東京美術学校でともに美術を教えていた大村西崖から贈られた『支那絵画小史』など、多種多様な人士からの寄贈書を見ることができます。文学者にかぎらず、医学や園芸、哲学、美学、旧藩主とのつながりまで、鷗外文庫の本のなかには鷗外の交友関係がそのまま刻印されているようです。


『窓』（資料番号4-11）

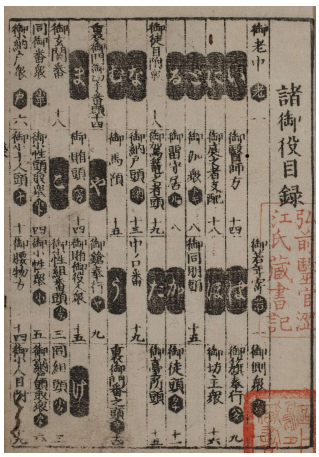
本展最後の第5章では、作品のもとになった資料をお出しいたしました。この章に出展しました本は、東大でもしばしば展示しますし、各文学館にお貸しして展示することも少なくないので、それほど珍しいものばかりということではありません。

『支那絵画小史』（資料番号4-20）

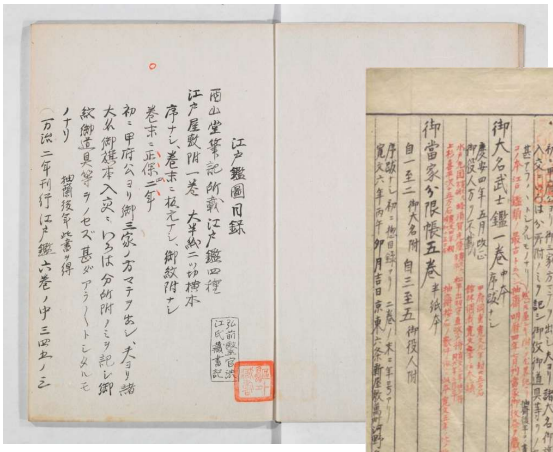


『抽斎年譜』（資料番号5-2）

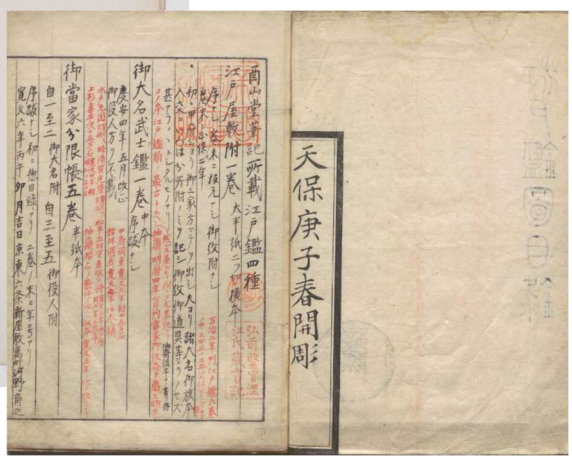
たとえば、「渋江抽斎」を書いた時に、抽斎の息子さんである渋江保に書いてもらった『抽斎年譜』『抽斎歿後』など。もちろん、鷗外が渋江抽斎に「出会った」きっかけである、「弘前医官渋江氏蔵書之記」という蔵書印がある本も出しています。鷗外文庫本の渋江抽斎著『江戸鑑図目録』は、誰かに写させた本なのですけれど、でも原本にある印記までちゃんと筆写していますね。参考までに、画面には国立国会図書館本をお示ししておきました。本展では借用して出展するところまではいたしておりませんので、必要でしたらウェブ上のデータベース、国会図書館デジタルコレクションでご覧ください。



『武鑑　文化十二年』
（資料番号なし・画像DB）
「弘前医官渋江氏蔵書之記」
の蔵書印がある

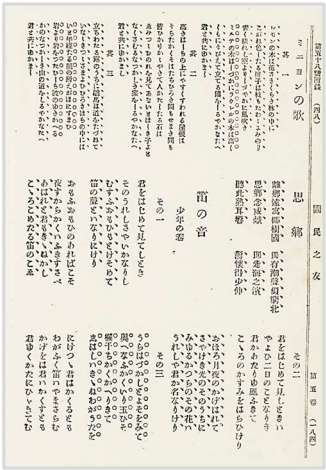


『江戸鑑図目録』
（資料番号5-3）



『江戸鑑図目録』
（国立国会図書館ウェブサイトから転載）

それから、鷗外は翻訳者としても非常にすぐれた業績を残していますので、その翻訳原本もいくつか出展してあります。画面右側に示しましたのは、明治 22（1889）年の夏に出された訳詩集『於母影』の翻訳原本、*Deutsche Lyrik* です。画面にお見せしています『於母影』のページのなかだと、「思郷」の翻訳に用いられました。一方、*Deutsche Lyrik* でお示しした部分は、これは特に翻訳されていない作品なのですけれど、「宛然 Goethe」というこの書きかたがいかにも鷗外らしいので、お目に掛けておきます。こちら、「えんぜん」と読むのか、それとも「さながら」と読ませたいの

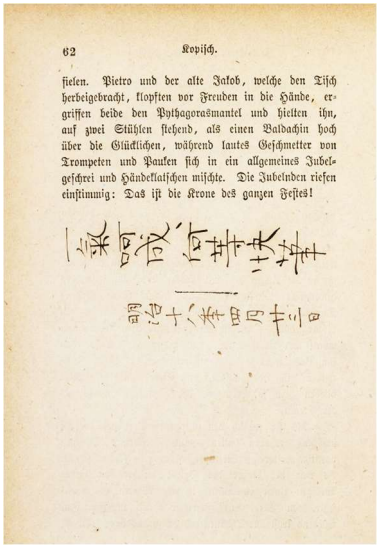


「於母影」『國民之友』第58号（明治22年8月）
附録より（人間文化研究機構国立国語研究所所蔵）

Deutsche Lyrik
（資料番号5-17）

か、ともかくこんなふうに漢文と、横に倒した欧文とを混ぜて書くのが鷗外の書入れの特徴です。こういう書きかたって、ほかではあんまり見る機会がなく、でも鷗外文庫本ではごく一般的に行われています。

もう1例、ドイツ語の書籍のなかに、本自体を横に倒して漢文を書込む、こちらもいかにも鷗外らしい書入れをお示ししておきました。「はげあたま」という翻訳小説の原作で、コピッシュ（A. Kopisch）の *Ein Carnevalsfest auf Ischia*（「イスキアのカーニバル」）という作品です。鷗外はここに、「一気呵成、何等快筆」と書入れていて、一気に作品が展開していて大変面白いと感じたようです。明治18（1885）年4月23日と、日づけまで記されていますので、留学中の読書であることがわかります。


62 Kopisch.

fielen. Pietro und der alte Jakob, welche den Tisch herbeigebracht, klopften vor Freuden in die Hände, ergriffen beide den Pythagorasmantel und hielten ihn, auf zwei Stühlen stehend, als einen Baldachin hoch über die Glücklichen, während lautes Geschmetter von Trompeten und Pauken sich in ein allgemeines Jubelgeschrei und Händeklatschen mischte. Die Jubelnden riefen einstimmig: Das ist die Krone des ganzen Festes!

Deutsche Novellenschatz
（資料番号5-18）
「はげあたま」原作の
A.Kopisch,
Ein Carnevalsfest auf Ischia

さて、ここまで、本展に出展した資料の概略をご紹介してまいりました。残る時間で、今回の展覧会の目玉である新出の草稿、それからエリーゼに与えた本についてご紹介いたしましょう。

四　エリーゼに与えた本と新出草稿

まずは、エリーゼのことからお話ししてゆきましょう。

ご存じのとおり、「舞姫」は太田豊太郎という鷗外自身を思わせる青年が、ドイツで出会ったエリスという恋人と一緒に暮す物語です。彼はエリスとの関係が問題視され、勤めていた官庁を免職になってしまうのですけれど、そこへ日本からやって来た天方伯爵の誘いを受け、日本に戻ることを決意します。おなかに子供がいるエリスを捨てて日本に帰る、豊太郎のその意思を聞いたエリスは、衝撃で発狂してしまうというストーリーでした。

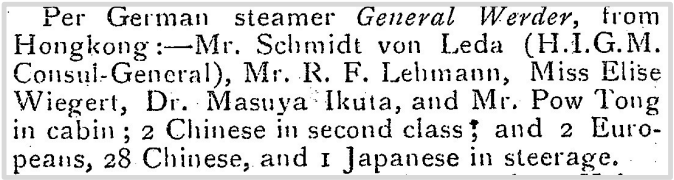
鷗外の歿後、このエリスのモデルとなったドイツ人の恋人がいたという事実が、妹の小金井喜美子と息子の森於菟の証言で明らかにされました。もう昭和期に入ってからのことです。於菟が先に言及してしまったので、隠しておくことができず、妹の喜美子が詳しく証言したのでした。

> ただ普通の関係の女だけれど、自分はそんな人を扱う事は極不得手なのに、留学生の多い中では、面白ずくに家の生活が豊かなように噂して唆かす者があるので、根が正直の婦人だから真に受けて、「日本に往く」といったそうです。…かれこれしている中、日も立ってだんだん様子も分ったと見え、あきらめて帰国しようかといい出したそうです。…エリスはおだやかに帰りました。人の言葉の真偽を知るだけの常識にも欠けている、哀れな女の行末をつくづく考えさせられました。…誰も誰も大切に思っているお兄い様にさしたる障りもなく済んだのは家内中の喜びでした。

（小金井喜美子『森鷗外の系族』、大岡山書店、昭和 18 年、岩波文庫所収）

この喜美子の発言が非常に大きな影響力を持ちまして、彼女の言う「エリス」は無理に日本に押しかけて来たのだと、長く考えられてきたのでした。鷗外がドイツで遊んだ女が本気になってしまった、鷗外と結婚すれば金持ちの家に入れると誤解して無理に来日してしまった。でも、森家の側はエリスとの結婚なんてまるで考えていないので、みんなで説得してエリスを帰らせた。というわけで、お兄さまに障りがなかったら、家中の者がみんな喜んだというのですね。喜美子は文章がうまいので、この発言は強烈な印象を残しますし、彼女が恋人の名前を「エリス」としたため、小説「舞姫」の主人公と重なり、その物語のイメージが現実の鷗外に投影される形で、長い間誤解されてきていたのでした。

ところが、昭和 56（1981）年に中川浩一さんと沢護さんの 2 人が、横浜で発行されていた英字新聞 *The Japan Weekly Mail* の海外航路の乗船名簿から、Elise Wiegert（エリーゼ・ヴィーゲルト）という名前を見つけました。その来日や離日の日づけが、喜美子の証言や良精の日記、あるいは西周の日記など、さまざまな関係資料と符合していますので、彼女の名前はエリスではなくエリーゼであると、はじめて判明したわけです。


Per German steamer *General Werder*, from Hongkong:—Mr. Schmidt von Leda (H.I.G.M. Consul-General), Mr. R. F. Lehmann, Miss Elise Wiegert, Dr. Masuya Ikuta, and Mr. Pow Tong in cabin; 2 Chinese in second class; and 2 Europeans, 28 Chinese, and 1 Japanese in steerage.

The Japan Weekly Mail 明治21年9月15日紙面
（東京大学総合図書館所蔵）

その新聞記事を見ますと、彼女は"in cabin"、つまり一等船室で来日したとわかります。"Miss Elise Wiegert"の少し上に見えている"H.I.G.M. Consul-General"、この"H.I.G.M."のほうはまだ調べていなくて、ぼくには何の略かわからないのですけれど、"Consul-General"のほうは総領事という意味です。つまり、彼女はどこかの総領事とおなじクラスの船室で来日したのでした（その後、石原剛さんより"His Imperial German Majesty"の略であるとご教示いただきました。また、冨崎逸夫さんが『鷗外』42 号に発表された研究によると、この人物は横浜にあったドイツ総領事館の総領事なのだそうです――注）。

さあ、そうすると、これはいったいどういうことだと議論が沸騰します。エリーゼは実は、富豪の娘だったのかと。

このエリーゼ探し、その後長く続いていたものの、なかなかこれ以上の情報が出てきませんでした。しかし、ついに近年、六草いちかさんが『鷗外の恋　「舞姫」エリスの真実』『それからのエリス』という 2 冊のご著書を刊行されまして、そのなかでエリーゼの本名がエリーゼ・マリー・カロリーネ・ヴィーゲルトであったこと、生年月日と父母のこと、遺族の存在、そして写真までも明らかにされました。これによって、鷗外がどんな現実を「舞姫」に取込み、どの部分を脚色して虚構にしたのか、その虚実がはじめて見えてきました。何より重要なのは、エリーゼは鷗外自身が結婚を前提に日本に招いた、その恋が家族や親戚の反対で引裂かれたのだという可能性が、かなりの確度を持つようになったということです。

鷗外はエリーゼがドイツに帰ったあとも、長く文通を続けていたことが、次女の小堀杏奴の証言によって知られます。しかし、そのやりとりのすべては、鷗外が亡くなる直前に焼却されています。したがって、現存する 2 人の交際のかたみは、文京区立森鷗外記念館の所蔵となっている、刺繍用の金属プレートだけだと考えられてきました。

でも実は、鷗外文庫のなかに、エリーゼ宛と思われるドイツ語のメッセージを記した本が、1 冊だけ残されていたのです。*Ein Einfach Herz* という、英国人作家の Charles Reade が書いた *Single Heart and Double Face* という小説の独訳本です。出版されたのは、鷗外が帰国する前年の 1887（明治 20）年で、それをドイツで買って船に持込んだのでしょうね。コロンボまで来たところで、あとの船で鷗外を追うように日本に向っているエリーゼに宛てて、港に残す形で送ったのだと、中井義幸さんが推定されています。

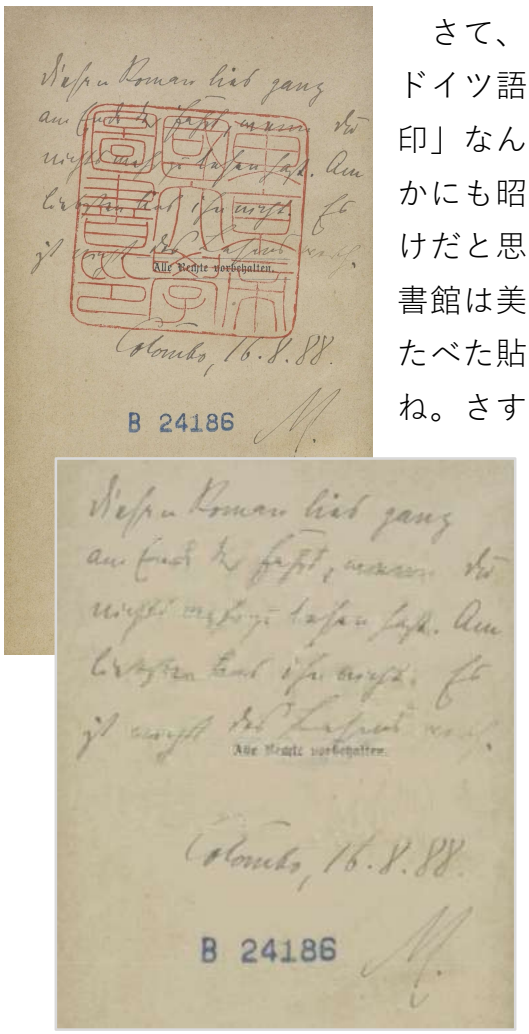
この本について、六草さんのご見解は揺れていて、1 冊目の『鷗外の恋　「舞姫」エリスの真実』のほうでは中井説を踏襲されているものの、続く『それからのエリス』では、エリーゼとおなじ船で日本に帰国した生田益雄に送った本だと、お考えをあらためられています。恋人宛の署名のはずが“M”となっていて、ファーストネームでないのが不思議だというのが、その 1 つの理由です。

これについては、ぼくもはっきりした検証はできていないのですけれど、鷗外が日本人に宛ててドイツ語で記した手紙は 1 通も確認されておらず、のちに英国に留学した夏目漱石もやはり、日本人宛の手紙では英文は用いていません。そう考えると、このメッセージをあえて独文で記す積極的な理由が見あたらず、これは素直にドイツ人に宛てたものと見てよいのではないかと考えます。19 世紀のこのころ、親しい間柄ではファーストネームで呼びあう習慣がすでに成立していたのか、手紙文の署名はどう記されるものだったのか、リンタローよりもモリのほうが呼びやすいことを考えると、鷗外が実際にドイツでどう呼ばれていたのかなど、検証すべきことはいまだ多いので、今後の研究の進展によって結論が変る可能性はもちろん残っています。

ひとまず、本展ではこのメッセージはエリーゼ宛のものと考えています。エリーゼは、船がコロンボに着いた時に、この本を受取ったのでしょう。それを携えて日本に着き、鷗外に会って返却した、そして本のなかのメッセージだったために焼却を免れ、鷗外文庫の 1 冊として伝わったのだと考えられます。何十年も書架に架蔵されているうちに、鷗外もその存在を忘れたのかもしれませんね。そうすると、いまのところ 2 人のやりとりで現存するのは、これが唯一ということになるのです。

エリーゼが自分のあとを追ってきていることを知った鷗外は、愕然として船のなかでふさぎこんでいたというのが、これまで行われてきた大方の見解でした。現在でも、一般的にはそういうふうに考えられているようです。でも、それだったらメッセージまで書き、こんな本を贈るはずはありません。ここからも、エリーゼの来日は鷗外が承知のうえだったという

ことが推定できるのです。この本は生田宛と考えられた六草さんも、エリーゼは鷗外が招いたという結論部分についてはおなじです。



鷗外がエリーゼに残した本
Ein einfach Herz：ein Roman aus dem Leben（資料番号4-21）
※下は、出口准教授による加工版

さて、このメッセージを画面にお示ししました。鷗外の美しいドイツ語筆記体によるメッセージのうえに、「東京帝国大学図書印」なんていう大きな印鑑をデカデカと捺してしまうあたり、いかにも昭和初期の帝国大学の威光と、こんな落書きなんか邪魔っけだと思う感じがひしひしと伝わってきます。もっとも、東大図書館は美麗な木版多色摺の表紙にだって、請求記号のシールをべたべた貼ってしまうので、昔はそういう感じだったんでしょうね。さすが帝国大学、といったところでしょうか。印鑑があんまり邪魔なので、ちょっと Adobe Photoshop で消してみました。ぼくの技術では、あんまりうまく消えなかったのですけれど…。

鷗外が書入れたメッセージ、こういう内容です。

Diesen Roman lies ganz am Ende der Fahrt, wenn du nichts mehr zu lesen hast. Am liebsten lies ihn nicht. Er ist nicht des Lesens werth. Colombo, 16.8.88. M

この小説は、旅の最後にもう他に何も読むものがなくなった時に読みなさい。まあ読まない方がいい。読む値打ちがない。　コロンボ　一八八八・八・一六　M

（中井義幸『鷗外留学始末』による）

エリーゼに与えた現存する唯一のメッセージで、どんな色っぽいことが書かれているのかと思ったら、拍子抜けですね。この本はつまらなかったよっていうだけですから。拍子抜けはするのですけれど、でもひとたび拍子抜けしたあとで、再度このメッセージを読むと、鷗外とエリーゼはいつもこういうふうに、「この本面白かったよ」とか「この本はつまらなかった」とか、そんなやり取りを日常的にしていたんだろうと想像されます。2 人の飾らない日常がうかがえるようですね。鷗外は”du”という親愛の 2 人称を使っていて、親しげな会話の様子が目に見えるようです。

先ほども申しましたとおり、鷗外があとから追いかけてくるエリーゼにこういう本を残したのだとすれば、彼女は鷗外の意に反して無理矢理押しかけてきたと解するには無理があります。それに、当時の一等船室の旅費は、鷗外のドイツでの生活費 1 年分にも相当する高額でした。もうひとつ問題は、50 日以上にわたる長期間の旅程です。当時の船旅はとても安全とはいえず、船が沈むこともありますし、病気も心配です。実際にエリーゼの来日から 1 年後、明治 23（1890）年の 9 月には、トルコの軍艦まで台風に遭って紀伊半島沖で沈んでいま

すし、二葉亭四迷がインド洋上で客死したのも有名な話です。そんな旅をしてまで、まだ開国して 20 年しか経っていない、つい 10 年前までは西南戦争という内戦が起っていた、言葉も通じない異国に渡るというのは、よほどのことですよね。こうやっていろいろ考えてゆきますと、エリーゼは鷗外が結婚を前提に、一等船室の旅費を払って招いたと考えるのが自然だと思うのです。

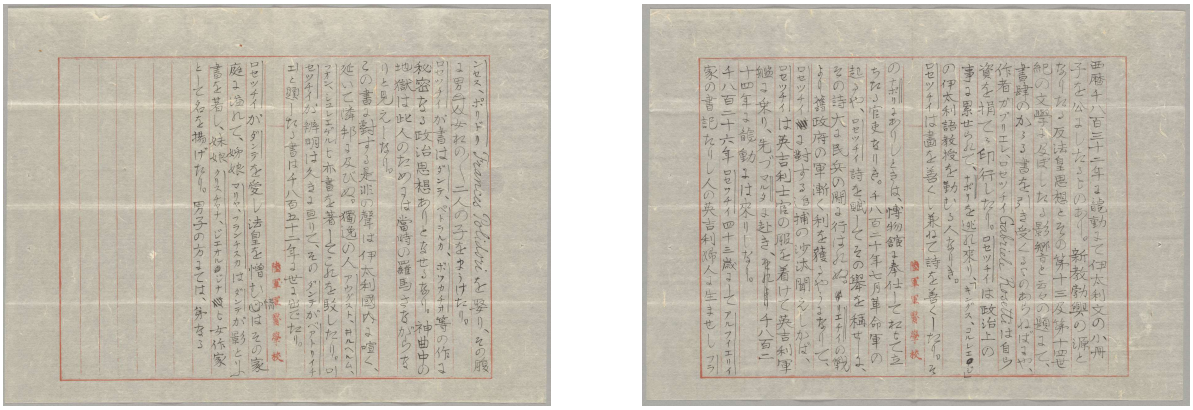
しかし、鷗外とエリーゼが結婚するとしたら、それは国際結婚になりますし、そもそも明治時代の感覚では、森家ぐらいの社会的階層だと自由恋愛なんてほぼタブーでした。結婚は家と家との結びつきを強めるためのもので、親の決めた許嫁と結婚するのが一般的です。鷗外にも、日本に帰ってきたわずか 3 日後に、親戚である西周の奥さんが縁談を持ってきています。留学中から、すでに準備されていたことは明らかですね。そういう日本の習慣のなかに、自由恋愛によるドイツ人との国際結婚を持込もうというのですから、これはもう大変なことです。

のみならず、陸軍の軍人としても、国際結婚なんてとても歓迎されません。本当に結婚するのなら、陸軍を辞めねばならないかもしれず、そんななかで結婚の意志を貫くことはやはりできなかったのでした。エリーゼもその事情に直面し、帰国せざるをえなかったと思われます。

彼女が帰った直後、鷗外は赤松登志子と結納をかわし、翌年 2 月に結婚するのですけれども、さらに翌年、明治 23（1890）年に長男於菟が生れた直後、すぐに離婚してしまいます。いちばん気の毒なのはもちろん登志子だとはいえ、恋人と引離された直後に、準備された許嫁と結婚せねばならないというのは、鷗外にとっても酷だっただろうと思われます。このメッセージは、まだそんな未来なんて知らない日の 2 人のつきあいを伝え、またエリーゼが帰国したあとも続いたという、文通の様子もうかがわせているようです。

こうしたエリーゼとの恋愛を題材として、鷗外が「舞姫」にどう昇華したかということは、この作品を読むうえで大きな問題なのですが、それはまた別のところに譲りたいと思います。

さて、続いて本展のもう 1 つの柱である、新出の草稿です。これは、*Die Grenzboten* というドイツ語雑誌に挟まった状態で、数年前に見つかりました。



『ガブリエーレ・ロセッティのダンテ受容に関する草稿』（資料番号Ｉ）

先ほど、鷗外文庫プロジェクトのなかで、総合図書館書庫の全書籍を調査したと申しました。ただし、それはあくまでも全「書籍」でありまして、雑誌にまではおよんでいなかったんです。総合図書館の雑誌は、これまたものすごい数にのぼるので、書籍に加えて雑誌までも悉皆調査するのは無理だったのと、もうひとつ鷗外文庫に雑誌はないと考えられていたためです。しかし、プロジェクトが終了したあとで、書架整理中の図書館員がこの雑誌を偶然に発見しました。例の「鷗外蔵書」印が捺されていたので、鷗外文庫本だとわかったのですけれど、そのページの間に挟まっていたのがこの草稿です。

中身としては、19 世紀前半にイタリアを逃れ、英国に渡ったガブリエーレ・ロセッティという人に関する、一種の評伝です。当時、イタリアは統一運動期にありまして、それこそ内戦が起っていた時代でした。このガブリエーレ・ロセッティは、革命軍を鼓舞する詩を作り、それが広く歌われたものの、結局その革命軍が負けてしまい、それで故郷のナポリにいられなくなって英国に渡ったのでした。

彼は英国にて、ダンテやペトラルカ、ボッカチオらの作品のなかに、12 世紀ころの教皇庁の腐敗が暗喩されているという論文を自費出版しました。それに対し、ドイツのアウグスト・フォン・シュレーゲルが反駁する論文を出したので、ロセッティはさらに再反駁の本を出したという論争がありました。今回の新出草稿は、そういうロセッティの半生を紹介する内容です。結局、このガブリエーレ・ロセッティはキングス・カレッジでイタリア語の教授となり、そのまま英国にて生涯を終えます。その長子のダンテ・ゲイブリエルが画家・詩人となり、ほかの子供たち、つまり長女のクリスティーナ、次女のマリア・ジョージナ、次男のウィリアム・マイケルも、それぞれ有名な著述家になったことは、先ほど坂井先生からのご紹介にあった通りです。

以上のような草稿の内容は、鷗外が明治 30（1897）年から明治 31（1898）年にかけて、東京美術学校、すなわち現在の東京藝術大学で行った「西洋美術史」講義でも講じられていたことがわかっています。こちらの講義について、鷗外自身は文章にまとめたりはしていないのですけれど、受講生だった彫刻家の本保義太郎が講義ノートを残していまして、それがすでに全文翻刻されて学術誌に掲載されています。この点、大妻女子大の須田喜代次さんから大変重要なお教えをいただきました。

本保義太郎がとった講義ノートと、この新出草稿とを見くらべますと、「西洋美術史」講義のほうでは、当然ながら話題の中心は長子のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティにあります。しかし、ほかの画家たちの出自や家族については、ごく簡単に言及しているだけのところ、ロセッティの場合は父、すなわちガブリエーレ・ロセッティの生涯がかなり詳しく説明されているのですね。そういうわけで、この草稿は「西洋美術史」講義と浅からぬ関係にあり、執筆時期もおおよそこのころだろうと推定いたしました。

ただ、ではこの草稿が具体的に何であるかということまでは、厳密には断定できませんで

した。かつて、大学での講義に際しては詳細な原稿を作るのが一般的でしたから、これも講義に備えた原稿として書かれ、用いられずに破棄された草稿であった可能性もあります。しかし、それにしては内容があまりに父のガブリエーレ寄りで、美術史の講義を目的として書かれたようには見えません。一方、講義から派生して書かれた、独立した作品と考えるには、まず「陸軍軍医学校」の罫紙を用いている点が不審です。鷗外はとても厳密な人なので、文学作品を書く時には、勤めていた軍医学校や宮内省、帝室博物館などの用紙は使っていなかったようなのです。そうすると、「陸軍軍医学校」の罫紙に小説や評論の原稿を書いたとは考えにくく、判断が難しいところです。

個人的には、「西洋美術史」講義から派生し、評伝のような何らかの作品にまとめてゆくことを見込んで一度書き記してみた、草稿なのかと考えています。ただ、それを裏づける証拠はありません。文章の途中で中断し、書くのをやめたまま忘れられた、つまり実質的には破棄された草稿ですから、美術史っぽくないと言ったところで、それこそが原因で捨てられた講義原稿だった可能性はあるわけです。というわけで、現時点でこれ以上の断定は困難です。

ただし、この草稿と「西洋美術史」講義とをあわせて検討すると、見えてくるものはちゃんとあります。先ほど、草稿の内容がガブリエーレ・ロセッティに関する評伝のようなものだと申しました。そして、そのおなじ内容が、「西洋美術史」講義にも見えているとも申しました。でもこれは、よく考えると少し不思議な事態です。

というのは、美術史の講義と聞くと、普通は作品を紹介するとか、あるいは技法を紹介するとか、そういうことが話されるのだろうと想像します。ところが、鷗外が講じたのは、本保義太郎の筆記ノートを見ると、どうも画家たちの略伝の紹介だけなのです。この画家はどういう人であったか、いつ生れてどういう家で育ったか、どういう生涯を送ったかというような各画家たちの略伝を紹介する形になっていて、その集積が美術史だというのです。

こういう内容では、現代の目から見て美術の歴史であるとはとても受取りがたく、ぼくの同僚の今橋映子さんが先に出された大著『近代日本の美術思想』のなかで、結局鷗外は「美術史」を完成させられず、鷗外の後任である岩村透を待たねばならなかったと指摘されています。ただ一方で、現代的な意味での美術史ではなかったにせよ、ここには鷗外による歴史把握があったはずなのです。すなわち、鷗外はどうやら人間の積み重ねこそが歴史だと考えていたらしく、そうやって人間が積み重なって形作られてゆく「歴史」のなかから、自分が面白そうだと思った人をクローズアップして、その生涯を文章にまとめていったのでしょう。それが、今回の場合はガブリエーレ・ロセッティだったわけで、この草稿は作品にまとまりませんでしたけれど、ほかの歴史小説や史伝といった作品もこうして生み出されたのだろうと考えられるのです。

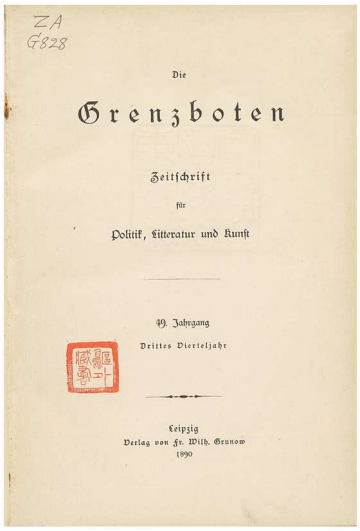
実際、鷗外は西洋ではなく日本の美術史を扱った、「日本芸術史論」というノートも残し

ています。そして、そちらもやっぱりおなじように、日本史上の美術作者たちの略伝が集められています。そうやって、古人の伝を次々に積み重ねることで歴史を捉えながら、そのなかでこの人が面白い、この人がやったことは目を惹くというような興味を文章で再構成すると、今回の新出草稿のようになるのだろうと思います。もちろん、つねにこうした段階を挟むわけではないのでしょうけれど、完成作品として発表された評伝や歴史小説などが、この延長上に生れていることは明らかです。つまり、この草稿には、そういう鷗外文学の生れ出づる始原が、そのまま閉じこめられているのです。それが今回は作品に結実せず、完結もされない状態で雑誌のなかに残され、筆記からおよそ 120 年もの長い時間、鷗外文庫に眠っていたというのは、いかにもロマンティックなことですよね。

画面には、ロセッティ家の人々の姿をお示ししました。真んなかの、ちょっとこわそうな人が父のガブリエーレ・ロセッティで、その周囲にお示ししましたのがダンテ・ゲイブリエルと弟のウィリアム・マイケル、長女のマリア・フランチェスカ、妹のクリスティーナ・ジョージナです。こういうロセッティ家の人たちに対し、ガブリエーレへの反駁文を書いたアウグスト・フォン・シュレーゲルの顔も出しておきました。

なお、父ロセッティやシュレーゲルの書いた本や論文はどれか、鷗外はその情報をどこで得たのかといったことについては、かなり細かな話になりますので、今日の講演では割愛させていただきます。来年、令和 5（2023）年 1 月刊行予定の『比較文学研究』108 号に、草稿全体の翻字と解題を発表しますので、ご興味のあるかたはそちらをご参照ください。

草稿が挟まっていたドイツ語雑誌、*Die Grenzboten* についても、一言だけご紹介しておきます。今回見つかったのは、1889（明治 22）年から 1890（明治 23）年に刊行された 2 年分、全 8 冊です。週刊誌ですが、4 半期ごとに合冊されていますので、1 年に 4 冊、合計 8 冊が鷗外文庫本として確認されました。全体に鷗外の書入れがあり、また自筆のメモが残るしおりも挟まっています。



Die Grenzboten（資料番号Ⅱ）

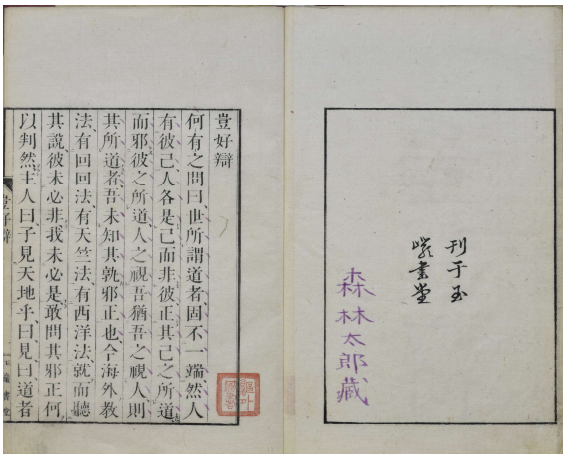
実はこの雑誌、ドイツから帰国してまだ間がない、「舞姫」とおなじ明治 23（1890）年に書かれた鷗外初期の評論、「演劇改良論者の偏見に驚く」「再び劇を論じて世の評家に答ふ」のなかに、すでに「グレンツボオテン」として言及されています。帰国後に、ドイツからわざわざ取寄せたんでしょうね。また、草稿が挟まっていた第 49 巻第 3 号（1890 年第 3 期）には、先ほど申しました「西洋美術史」講義の典拠となった記事も確認できます。そういうところからも、新出草稿と「西洋美術史」講義とのつながりが確認できるわけです。

だとすれば、新たに見つかった 8 冊の全体を綿密に調べてみれば、もっとほかの作品への通路が見つかるのかもしれません。でも、ただドイツ語だというだけでなく、何しろ活字の

字体が古い、いわゆるひげ文字で印刷されていますので、それを読むだけでもひと苦労です。

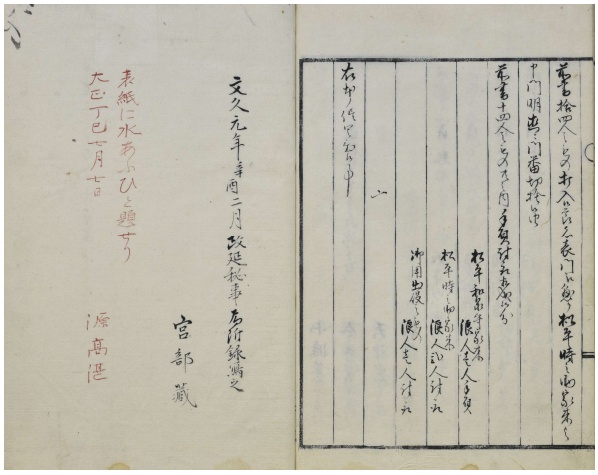
今回、新出草稿とこの雑誌について調査するには、ぼくだけではとても無理なので、大学院生の鶴田奈月さんとディ・マルコ・ルクレツィアさんに手伝ってもらいました。鶴田さんはおもに、草稿が挟まっていた雑誌 *Die Grenzboten* を調べ、草稿の典拠となった記事がないかどうかをチェックしてくれました。結局、該当する記事はなかったものの、かわりに「西洋美術史」講義の典拠資料が見つかったのでした。ルクレツィアさんのほうは、草稿に書かれている父ロセッティの生涯やシュレーゲルとの論争について調べてくれました。残念ながら、どちらの調査でも、鷗外が用いた典拠文献を特定することはできなかったのですけれど、複数の文献を参照して書いた可能性は当然あるでしょう。いずれにしても、2 人の協力がなければこの調査はとてもできませんでしたこと、ご紹介しておきます。

そして、こういうように、調べてみないと何が出てくるかわからない、鷗外の作品や活動のどこにつながっているかわからないというのは、鷗外文庫全体にとって言えることです。何しろ数が多いので、とにかく何が埋っているかわからない。本の題名だけはリスト化できても、どのページにどんな書入れがあるのか、信頼できるデータはまだ公開されていない。そして、それぞれの本の内容や書入れが、鷗外のどの作品やどの事績と関連しているのかなんて、未解明のことばかりです。本日のお話の締めくくりとして、鷗外文庫にいまだどのような資料が眠っているのか、どれほどの可能性を秘めているのかということを、少しだけご紹介したいと思います。



『豈好辯』（鴎B60:1005）

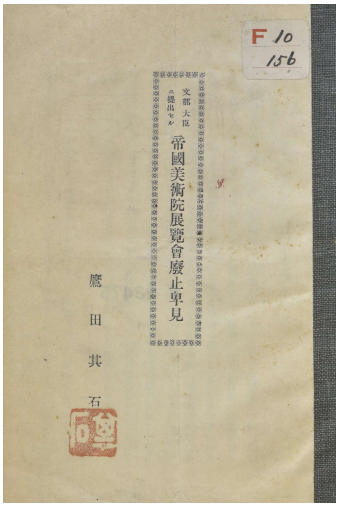
まず取上げましたのは、幕末水戸学の巨魁である会沢正志斎の『豈好辯』、キリスト教を儒学の立場から論難した本です。所蔵者として書かれた「森林太郎蔵」の記述、これは字体などから、非常に早い時期の書入れと考えられます。ご存知のかたもいらっしゃるかと思いますが、津和野藩では幕末から明治初期、きわめて苛酷なキリスト教徒の弾圧が行われました。拷問によって 40 人近い殉死者を出しまして、のちに乙女峠マリア聖堂が建立されています。鷗外がまだ津和野にいたころに起きたこの出来事について、彼は特に何も言ってないのですけれど、その鷗外がキリスト教を論駁した本をかなり若いころから蔵し、おそらくは読んでいただろうことは、どう考えればよいのか。このことはまだ十分に研究されていません。



『水葵』（鴎G27:200）

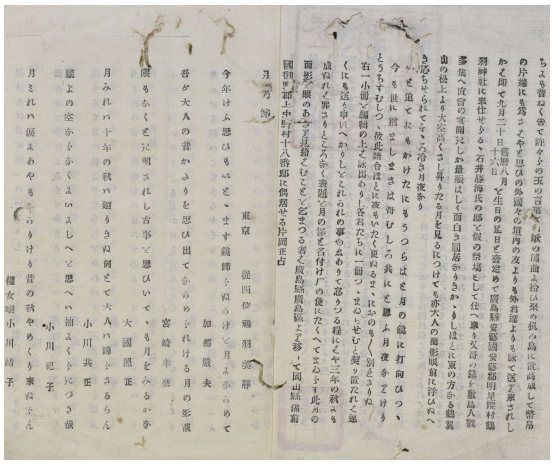
あるいは、鷗外文庫には『水葵』と名づけられた写本があります。これは、幕末の資料である『政延秘事』という本を、別人が書き写した写本でして、鷗外はそれを入手し、例のとおり改装したうえで、みずから「水葵」という名前を与えているのです。これについては、まだ中身を調査していないので、何であるかということさえわかっていないのですけれど、何しろ歴史資料ですから、鷗外の文事や活動のどこかとつながっていてもおかしくありません。

それから、こちらは鷹田其石による私家版、『帝国美術院展覧会廃止卑見』です。書籍というより、抜刷りとかブックレットと称したほうが近いような薄い本です。これは、帝展の内紛を示す資料でして、其石はこの弾劾文を書いて文部大臣に提出したらしいんですね。それが、なぜ鷗外のところに残されているのでしょうか。鷗外は帝国美術院長でしたから、どこかから受取ったのでしょうけれど、では彼はこれをどう受止め、どう処理したのか。事にあたる、鷗外の美術院長としての活動や位置はどのようなものだったのか。そういうようなことをうかがわせる資料です。



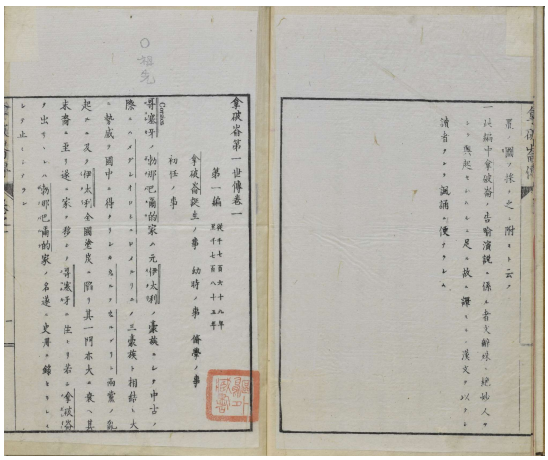
『帝国美術院展覧会廃止卑見』（鴎F10:156）

続いてお示ししましたのは、『月乃俤』という明治 10 年代の本です。鷗外の故郷の津和野藩では、津和野本学と称する国学が盛んに行われていました。その津和野本学を創始したのは、鷗外にとっては先人である大国隆正という人でして、その隆正の十回忌に際し、門人や関係者たちが寄せた和歌を、弟子の片岡好古が編んだのがこの本です。実はこの本には、あの「医学士森林太郎図書之記」という大きな印鑑が捺されているんですね。ということは、鷗外は東大を卒業したころにこの本を手に取ったようなのですけれど、では鷗外は津和野本学からどのような影響を受け、その影響はどこまでおよんでいたのかというようなことを、この資料は示唆しているのだろうと思います。



『月乃俤』（鴎E31:585）

それからこちらは、『拿破崙第一世伝』という本です。山県有朋の序文を添えて、陸軍文庫から明治 13（1880）年に出されました。鷗外の陸軍入りは明治 14（1881）年ですから、その前年の本ということになります。そして、ここにも鷗外の書き入れがある。彼は陸軍に入ったころ、もしくは入る決意をしたころでしょうか、山県有朋の序文があるこの本をどう読み、陸軍入省にあたって何を備えようとしたのか、もしかしたらそんなことがわかるかもしれません。

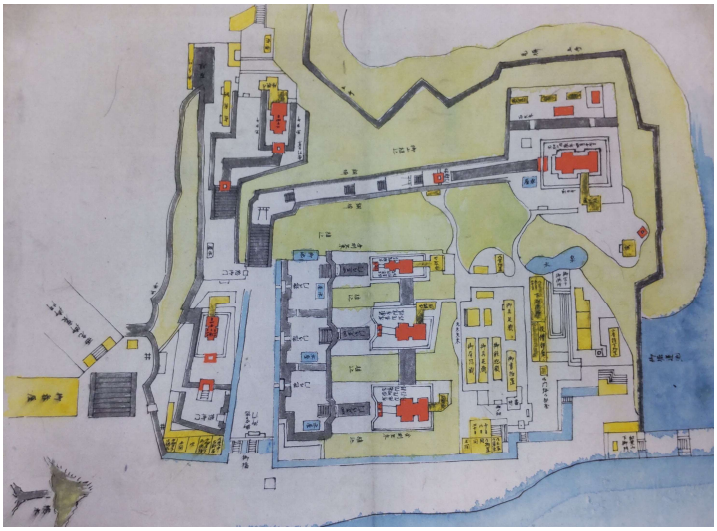


『拿破崙第一世伝』（鴎H40:14）

軍事関係ということですと、第 1 次世界大戦中、膠州湾の青島で戦われた日本軍とドイツ軍との戦争に際し、ドイツ軍の配置と日本軍の前線を示した地図も所蔵されています。『陸海軍用膠州湾青島詳図』という地図で、こちらは画像データベースでも公開されています。よく見てみると、地図中に 9 月 27 日とか、28 日とかいう日附が書いてあって、日本軍の進軍をメモしているらしい。第 1 次大戦は大正 3（1914）年の開戦ですので、鷗外が陸軍に勤めた最後のころの戦いです。こういうような、軍における鷗外の活動を示す資料も、鷗外文庫にはたくさんあるのですけれど、まだほとんど研究が進んでいません。

『陸海軍用膠州湾青島詳図』（画像DB）

それから最後に、おなじ地図資料として、『楓山図』を挙げておきました。江戸城、つまりいまの皇居のなかにある、紅葉山の絵図です。きれいな彩色絵図でして、鷗外が何のためにこれを所蔵していて、どう活用しようと考えていたのか、まだ何もわかっていないようです。



『楓山図』（鴎G28:14）

おわりに

こんなふうに、鷗外文庫にはまだまだ調査のおよんでいない資料がたくさん眠っています。ぼく自身、はからずも鷗外文庫にかなり長く関わることになりまして、そのはかりしれない奥ゆきに茫然とするような思いを抱いています。そのことを、今回の展示の冒頭、総解説にこんな風に書いておきました。「われわれが読む鷗外の遺した文章が、いわば百の門から入って歩く通りだとすれば、鷗外文庫はその通りと通りのあいだを埋めつくす屋宇である。入ってみねば何があるかわからず、またその裏手がどこに通じているかも判然としない、無数に並ぶ甍なのだ」と。

鷗外文庫は、それぞれの本のなかに入ってみないと、どんな内容なのか、どんな書入れがあるのかわからないし、それが鷗外のどの作品に、どの活動に、どの事蹟に通じているのか、まったく判然としない。その意味で、鷗外文庫はこの総合図書館の地下書庫に眠っている、無数に並ぶ「テエベスの甍」なのだと思います。この鷗外文庫という迷宮を、いずれ完全なデータベースとして公開し、鷗外研究に一層役立てられることを心から願いつつ、今日のお話を終わりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

質疑応答

出口先生、ありがとうございました。さて、ここからはご参加の皆様からの質疑応答に移りたいと思います。既に Zoom の方にご質問が届いているようですので、まずはそちらの方からいくつかご紹介させていただきます。非常に勉強になりました、というような感想も入っております。

Q1：鷗外文庫の資料には書入れがあると知りましたが、それは他の作家や、明治時代の文豪などでも同じなのでしょうか。それとも特に森鷗外は書入れが多いのでしょうか。その書入れが残っていることによって、鷗外の研究は、進んでいる面があるのでしょうか。

A1：ご質問、ありがとうございます。文学者の所蔵本への書入れという点では、東北大に所蔵されている漱石文庫が有名です。そちらに残る書入れは、基本的にすべて翻字され、『漱石全集』にも収められています。

ただ、個人的な印象としては、鷗外の書入れはかなり多い印象です。ぼく自身、文学者の旧蔵書について大規模な調査を行った経験は、この鷗外文庫しかないのですけれど、それでも鷗外の書入れはかなり綿密で、これほどたくさんの書入れを残した人はあまりいないのではないかと思います。

実は、鷗外のように江戸時代に生れた人だと、本に書入れをするというのはさほど珍しいことではありません。学者、知識人とされるような人たちは、その自負のもとに、自分の考

えや批評、考証などを本に直接書入れてゆく。後代の人が、その書入れを見て勉強したり、誤っているところはなおしたりしながら、知識を積上げてゆくようなところがあるんです。それこそが読書であり、学問であったんですね。だから、鷗外も先人の書入れを大切にしていたんでしょう。渋江抽斎のことも、そうやって知って興味を持ったわけですし。

そしてもちろん、鷗外文庫の書入れは鷗外の研究に生かされています。若年時、鷗外が漢籍をどのように受容していたのかとか、歴史小説の資料をどのように作品に取込んだのかとか、翻訳原本をどう読んだのかとか、そういったことがわかる書入れですね。そうやって、研究に役立っていることはたくさんあるのですけれど、何しろ鷗外文庫はあまりにも多すぎるために、全体の翻字は進んでいないのです。だからこそ、今後の研究に役立つ書入れはまだまだ残されているはずだと、ぼくは確信しています。

Q2：東大の旧図書館をつくった山口半六はフランスに留学しているのですが、鷗外との年の差は 4 歳ぐらいです。山口半六は東京芸大の奏楽堂もつくっているので、多分鷗外と面識があったのではないかと思うのですが、関係の資料はありますか。
A2：ありがとうございます。すみません、不勉強でまったくはじめてうかがう話でした。そのお名前自体もはじめて聞くことで、いますぐに何かお返事するのは難しいです。青田寿美さんという、国文研に勤めておられる研究者が、鷗外の日記に大変ていねいな索引をつけられているので、それを引くと何かつながりが出てくるかもしれません。

Q3：ご講演ありがとうございました。鷗外文庫の本がいつ頃購入されたか、あるいはいつ頃鷗外が読んだかについては、印鑑などから推量できるということでしたが、他に何か使われている基準はあるでしょうか。印鑑だけでは限界もあるかと思って聞いていたのですが。どういう方法で推定されているのかうかがえたら嬉しいです。
A3：読書年次の推定は、実際には非常に難しいところです。蔵書印は、たしかにひとつの手がかりにはなるのですけれど、捺されている本自体があまり多くありません。鷗外文庫の本は多くが無印なので、「医学士」の印があると若いころのものだ、程度の手がかりぐらいにしかならないんですよね。あとは、鷗外は一時期、日記に本の購入記録をつけているので、それと対照することでわかったり、作品のなかで言及されていたり、そういうことから推定してゆくしかありません。特定の分野、たとえば仏教関係の本とかだと、鷗外は小倉に赴任してから興味を持ちはじめましたので、おそらく明治 30 年代のなかば以降の読書だろうと推定されるなど、実人生と対照することでわかる部分もあります。

それから、書入れの筆蹟によっても、何となく感じられることもあります。見ていると、この筆蹟は若いころだなとか、この書きかたは晩年だなとか、そういうふうに感じられるところもあるのですけれど、結局は感覚的なものなので、たしかではありません。だから、いま申しましたように、いろんな資料をつきあわせながら慎重に推定してゆくわけです。それでもやっぱり、不確定な部分が残らざるをえず、厳密な考証ということになるとどうしても

限界を抱えているという感じでしょうか。

Q4：鷗外文庫書入本画像データベースを時々拝見し、利用しています。仏教思想への理解の深さに驚かされることがありました。鷗外の書入れと鷗外の作品や事績との関係で明らかになっていることについて、まとめて見られる論文やデータベースなどはありますでしょうか。不勉強で恐縮ですが、これを見るとよいというものがありましたら、ぜひご教示ください。
A4：ありがとうございます。しかし、残念ながらない、というのが実情です。今回の図録にも書いたのですけれど、鷗外文庫に蔵される約 19,000 冊もの書籍のなかには、あまりに厖大な書入れがあるため、すべてを翻字することはとても無理なのと、毛筆と独文が混じっているので、それぞれの肉筆判読に慣れた専門家でないと読めないということが障害になって、データベースの構築ができていないのが現状です。鷗外文庫プロジェクトの時も、完全に判読するのは無理で、とにかくここに何らかの書入れがあるということだけの、簡単な調査票しか作れませんでした。現在までに出されている研究も、個々の論文のなかで書入れがばらばらに利用されているだけなので、それらを網羅するようなデータベースは存在していません。いずれ、利便性の高い完全なデータベースを作りたいとは思うのですけれど、あまりの前途の多難さに茫然としているところです。

Q5：鷗外は医学を学びドイツ語を使っていますが、英語の本も読んで書入れしているのでしょうか。もし科学と文学と英語の読書歴で何か特徴やエピソードがありましたらお教えください。
A5：今回の講演では、洋書についてあまり触れることができなかったのですけれど、実は鷗外文庫には英語の本はほとんどありません。なぜかというと、鷗外は英語が大嫌いだったんです。ドイツ語が最も得意なのは当然として、フランス語もかなり操れた人ですし、ラテン語も学んでいます。小倉に行ってからは、サンスクリットやロシア語にまで手を出していたようです。それなのに、英語はまったくでした。おそらく読めたとは思うのですけれど、どうも嫌いだったらしく、使おうとしていませんし、英語の本も非常に少ないです。

なぜなのか。これは何の証拠もない、ぼくの単なる想像なのですけれど、鷗外がドイツ留学から日本に帰国する際、途中でいちどロンドンに寄っているんですね。その時、同行していた上官の石黒忠悳は、鷗外が語学の天才であることを知っていますから、すべて鷗外に任せておこうと思っていた。ところが、現地の英国人に鷗外の英語はまったく通じず、通訳を雇う羽目になったんです。プライドの高い人ですから、それがかなりショックだったのじゃないかなあと、そんなことを勝手に思っています。後年、息子の於菟さんがドイツ語に加え、第 2 外国語として英語を学ぼうとした時、わざわざ制止しているくらいです。

そういうわけで、鷗外文庫には英語の本がきわめて少ないです。むしろ面白いのは、ドイツ語やフランス語の本はともかく、フィンランド語やデンマーク語の本が入っていることですね。鷗外がなぜそんなものを持っていて、どうやって読んでいたのか、よくわかりません。

でも、中身は露土戦争の記録だったりしますので、おそらくドイツ滞在中か何かに、軍事方面の勉強のために学ぼうとしていたのでしょう。でも、ぼくはドイツ語さえできないくらいなので、フィンランド語の書籍などとても手を着けられず、指をくわえて見ているしかない状況です。ぜひ、北欧の諸語ができる研究者に、鷗外文庫の多彩な書籍をご覧いただきたいと思うところです。

閉　会

　それでは、ご質問はここまでとさせていただきます。
　会場の皆様、出口先生に、もう一度大きな拍手をお送りください。ありがとうございました。最後に、12 月に出版される出口先生のご著書についてご案内いただけますでしょうか。

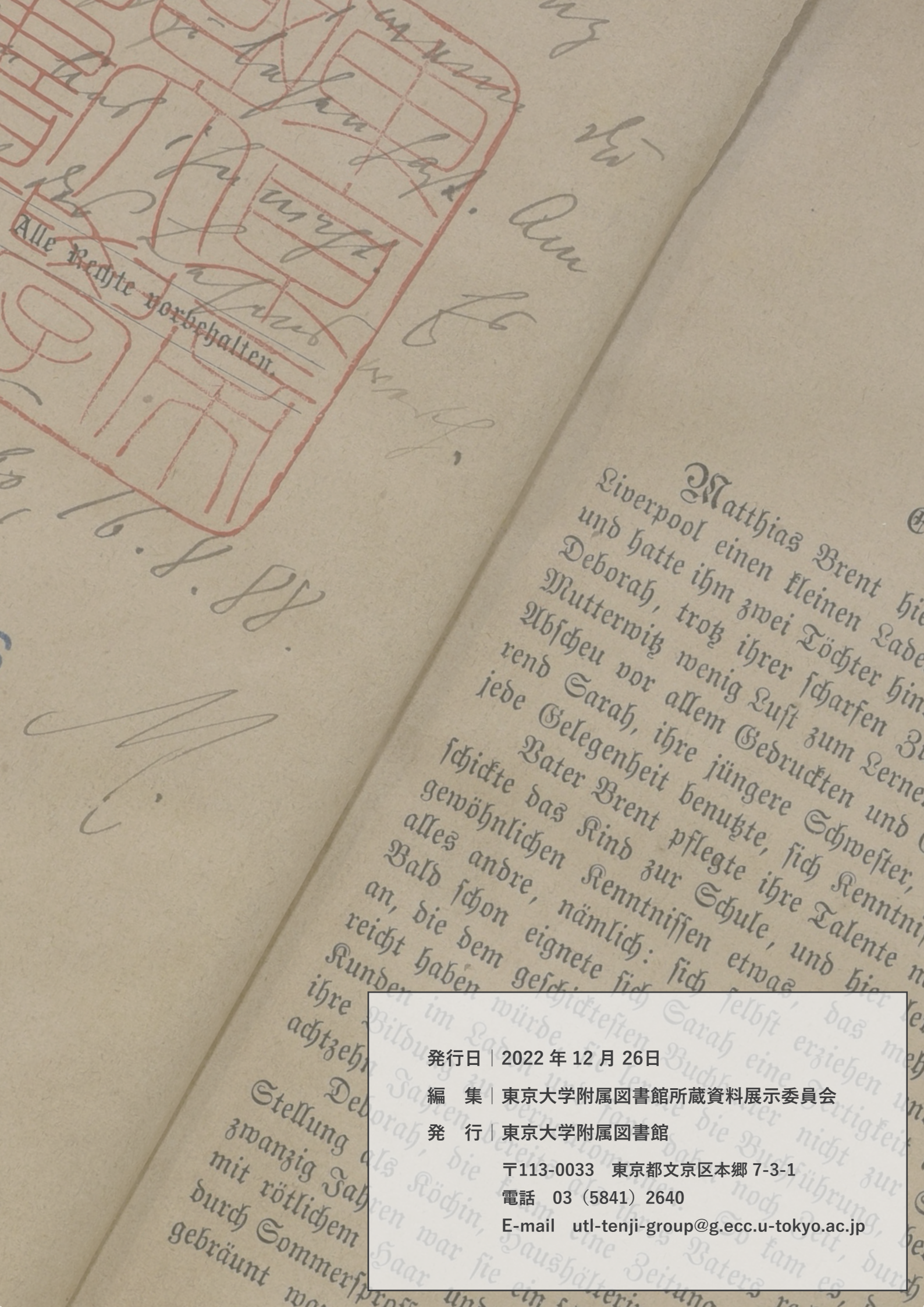
（出口）ありがとうございます。来月中旬、岩波ジュニア新書の 1 冊として、『森鷗外、自分を探す』を出していただけることになりました。若き鷗外の自分探しの苦しみ、「舞姫」をめぐる諸問題、体制の中心に勤める文学者であることなど、今日のお話の内容をさらに深く掘り下げて書きましたので、もしこの話が面白いと思っていただけたようでしたら、お手に取っていただけると嬉しく存じます。

　以上をもちまして、記念講演会を終了とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

講師略歴

出口　智之

1981 年愛知県生まれ。東京大学大学院総合文化研究科准教授。東京大学文学部卒業。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。
専門は日本文学。明治時代における文学、文人のネットワーク、文学と美術の交渉が研究テーマ。小説と挿絵を合わせて考察する「画文学」研究を切り拓く。
著書に『幸田露伴の文学空間』（青簡舎）、『幸田露伴と根岸党の文人たち』（教育評論社）、『画文学への招待』（Humanities Center Booklet No.12）、『森鷗外、自分を探す』（岩波ジュニア新書）、編書に『汽車に乗った明治の文人たち』（教育評論社）、『明治文学の彩り　口絵・挿絵の世界』（春陽堂書店）がある。



発行日｜2022 年 12 月 26日
編　集｜東京大学附属図書館所蔵資料展示委員会
発　行｜東京大学附属図書館
〒113-0033　東京都文京区本郷 7-3-1
電話　03（5841）2640
E-mail　utl-tenji-group@g.ecc.u-tokyo.ac.jp